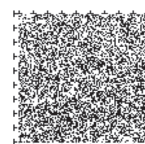


令和 6 年度 事業報告書



世田谷
ひきこもり相談窓口「リンク」



目次

あいさつ	1
第一章 事業概要	2
第1節 世田谷区ひきこもり施策	3
1. 国の動き	3
2. 世田谷区の動き	4
3. ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯	6
第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について	8
1. 「リンク」の相談窓口の流れ	8
2. 支援のネットワーク	9
3. 重層的支援協議会	10
4. 「リンク」窓口概要	11
第二章 事業実績	12
第1節 利用者実績	13
1. 全体	13
2. 令和6年度相談者	14
3. 令和6年度当事者	22
4. アウトリーチ件数	24
5. 相談者・当事者利用サービス	24
6. その他データ	32
第2節 開催会議・多機関連携	35
1. 重層的支援協議会・部会	35
2. 重層的支援会議（リンク検討会を含む）	39
3. 支援会議	40
4. 連携機関一覧	41
第三章 事業評価	42
第1節 事例報告	43
1. 両親の死後取り残されたケース	43
2. 障害福祉部門と連携をしたケース	44
3. 家族からつながって就労に至ったケース	45
4. 制度につながることで課題を整理したケース	46
第2節 「リンク」連携機関および利用者の声	47
1. 連携機関からの意見	47
2. 利用者の声	48
第四章 広報・啓発	50
第1節 研修開催と「リンク」紹介	51
1. 外部講師研修会	51
2. 「リンク」についての普及啓発	55
第2節 家族会・当事者会との連携	56
1. 家族会	56
2. 当事者会	56
3. 「オープンダイアログ体験会」（当事者会、家族会との連携）	56
4. 「第4回かたら～な」（当事者会、家族会との連携）	59
第五章 総括	61
第1節 令和6年度の取り組み状況	62
1. 「リンク」内の協働	62
2. 多機関との協働	62
第2節 次年度に向けて	63
1. 「リンク」の相談・支援体制の維持・向上	63
2. より良い支援に向けて	63

あいさつ

世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」も開設から丸3年が経過しました。ひきこもり当事者からの相談が全体の約40%、相談件数が全体で昨年度の約15%増となり、「リンク」の活動が地域の皆様の間に、少しずつ定着してきた手ごたえを感じているところです。

一方、少子高齢化や諸物価の高騰など、生活を脅かす課題は後を絶たず、ひきこもり当事者やご家族を取り巻く環境はますます厳しくなっています。ひきこもり当事者やそのご家族のお話を聞き、不安なく安定した生活のために課題を整理し、一緒に考え、当事者の方のペースを大切にしながら支援をしてまいります。

令和7年4月1日から、メルクマールせたがやとぷらっとホーム世田谷がともに、世田谷区役所三軒茶屋分庁舎5階に移転しました。ワンフロアでより連携しやすくなり、相談室も新しく整った環境で、相談支援を行ってまいります。

「リンク」は、ひきこもりにより生活のお困りごとや不安がある方やそのご家族、支援者からのご相談をいつでもお待ちしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

令和7年9月吉日

ぷらっとホーム世田谷センター長 田邊仁重

世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」が開設して3年が経ちました。メルクマールせたがやとぷらっとホーム世田谷による2機関共同運営という、相談窓口の段階から多機関協働を実践してまいりました。相談の対応はアウトリーチも含め年々増加傾向にあります。

令和6年度は、世田谷区内で重層的支援体制整備事業が進み、5地域にある総合支所の保健福祉センターが多機関協働事業者となりました。これまでのぷらっとホーム世田谷が主催する支援会議だけでなく、各地域で主催される支援会議に出席する機会も増えてきました。これまで「リンク」で取り組んできた、世帯全体を見て家族ひとりひとりに必要なサービスにつなげること、少し先の見通しをもって支援を組み立てることなどが区内全体で細やかに展開され、困難を抱えた方がひとりでも多く生きやすくなることを願います。

令和7年4月、STKハイツに入所していたメルクマールせたがや、ぷらっとホーム世田谷、若者サポートステーションの3機関は三軒茶屋分庁舎5階に移転しました。ワンフロアになったことで、より連携が密に取れる環境になりました。引き続き、ぷらっとホーム世田谷と力を合わせて、「リンク」につながった当事者の方々が自分らしく地域で暮らしていけるようサポートしてまいります。今後ともよろしくお願い致します。

令和7年9月吉日

メルクマールせたがや施設長 廣岡武明

第一章 事業概要

第1節 世田谷区ひきこもり施策

1. 国の動き
2. 世田谷区の動き
3. ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯

第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について

1. 「リンク」の相談窓口の流れ
2. 支援のネットワーク
3. 重層的支援協議会
4. 「リンク」窓口概要

第1節 世田谷区ひきこもり施策

1. 国の動き

国はこれまで、2001年に「10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域保健活動のガイドライン」、2010年に「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」を策定し、ひきこもり支援についてのガイドラインを示してきたが、2025年1月に新たに「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～」を発行した。

このハンドブックでは、支援の対象者を、従来厚生労働省がひきこもりの定義に用いていた「原則的には6カ月以上」のひきこもり状態の期間について、「期間は問わない」とした。また、目指す姿として、本人やその家族が「自律すること」を目標とした。

◇「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～」

(1) ひきこもり支援対象者の考え方

ひきこもり支援における対象者とは、社会的に孤立し、孤独を感じている状態にある人や、様々な生きづらさを抱えている状態の人となります。それぞれ一人ひとりの状況は違いますが、具体的には、

- ★何らかの生きづらさを抱え生活上の困難を感じている状態にある、
 - ★家族を含む他者との交流が限定的（希薄）な状態にある、
 - ★支援を必要とする状態にある、
- 本人やその家族（世帯）です。また、その状態にある期間は問いません。

(2) ひきこもり支援の目指す姿

ひきこもり支援では、本人やその家族が、自らの意思により、今後の生き方や社会との関わり方などを決めていくことができる（自律する）ようになることを目標とします。本人が社会参加を実現することや就労することのみを支援のゴールにはせず、自律に向かうプロセスとしてとらえることが必要です。

ここで言う自律は、「自身を肯定し、主体的な決定ができる状態」のことを指します。支援する際には、支援者も本人やその家族も、ともに「自律」することができるよう、互いにプロセスを共有していきます。

「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～」より抜粋

2. 世田谷区の動き

■ ひきこもり実態把握調査（令和2年6月～7月実施）

区内の状況を把握し、その傾向や特徴を捉え具体的な支援のあり方を検討していくことを目的に行った。

ひきこもり実態把握調査

- ・把握した当事者数 319 件
- ・年齢・地域等に多様な実態がある（何らかの障害を有すると思われる方が少ない）
- ・精神障害またはその疑い 56.7% 発達障害またはその疑い 29.7%
- ・長期化（10 年以上）した方を支援しているケースが多い… 37.6%
- ・複合的課題を抱えている
- ・同居家族も課題を抱えているなど、家庭内に複数の課題を抱えている
- ・支援機関へのつながりに苦慮している：コミュニケーションがとりづらい（会うときも困難。会えるが会話ができない。本人や家族に困り感がない。ひきこもっている子のことを話したくない。）

調査対象期間：あんしんすこやかセンター / 総合支所健康づくり課 / ぷらっとホーム世田谷・メルクマールせたがや

区 HP : <https://www.city.setagaya.lg.jp/documents/5501/2101135-8.pdf>



■ 世田谷区ひきこもり支援に係る基本方針の策定

ひきこもり支援に対する基本目標

ひきこもりの状態を含む、社会との接点が希薄な方や社会との接点を持ちづらい状況にある方とその家族が、気軽に相談・支援につながることができ、当事者が自分らしく暮らすことができる地域づくりをめざす。

具体的な取り組み

- ・相談窓口の明確化、支援機関相互の連携強化
- ・当事者・家族それぞれの課題やニーズに寄り添った、きめ細やかな支援の充実
- ・ひきこもりへの社会的理解及び支援者育成の促進

区 HP : <https://www.city.setagaya.lg.jp/documents/3264/1.pdf>



■ 世田谷区基本計画・実施計画

▶ 基本計画（令和6年度～令和13年度）

向こう8年間に区が重点的に取り組む政策、施策の方向性を明らかにした区政運営の基本的な指針であり、区の最上位の行政計画。ひきこもり支援の推進は、重点政策4「誰もが取り残されることなく生き生きと暮らせるための支援の強化」として位置付けている。

重点政策

4

誰もが取り残されることなく生き生きと暮らせるための支援の強化

多様な人が出会い、
支援の輪がつながる

目指す姿

- 全ての区民の人権が尊重され、年齢、性別、LGBTQなどの性的指向及びジェンダーアイデンティティ、国籍、障害の有無などにかかわらず自らの意思に基づき個性と能力を十分発揮することができ、生き生きと尊厳を持って地域で暮らすことができる。
- 支援が必要だと思われる人が自らの意思を尊重され、相談や支援、参加につながることができ、災害時にも必要な支援を受けられ安心して生活を送ることができる。



「世田谷区基本計画」より抜粋

▶ 実施計画（令和6年度～令和9年度）

基本計画に定めた理念や目標の実現に向けて、中期的な展望に基づき、区としての具体的な取組みを定めた総合的な行政計画。ひきこもり支援の推進は、施策9-2「地域生活課題の解決に向けた取組み」として位置付けている。

施策9-2	地域生活課題の解決に向けた取組み
番号4	ひきこもり支援の推進
目的と内容	令和4年（2022年）4月に開設した世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」を中心に、関係機関と連携しながら、ひきこもり等社会との接点が希薄な方や社会との接点が持ちづらい状況にある方とその家族を支援し、当事者・家族が自分らしく暮らすことができるよう、ニーズに寄り添ったきめ細やかな支援に取り組めます。

3. ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯

開設までの流れ

世田谷区内で明確な「ひきこもり相談窓口」がない中、以下の各機関が「ひきこもり」の相談を受けていた。

保健福祉センター 健康づくり課

こころや体の健康

ぽーと 地域障害者相談 支援センター

ぷらっとホーム世田谷 自立相談支援機関

生活全般の相談、
家計相談（世帯全体の家計相談、
障害年金の手続き、
各種債務や滞納整理など）
就労相談、セミナー、家族会

メルクマールせたがや 生きづらさを抱えた若者支援

個別相談（本人および家族）
居場所機能、出張相談会、
家族会、アウトリーチ、
臨床心理士、精神保健福祉士など
専門のスタッフが対応

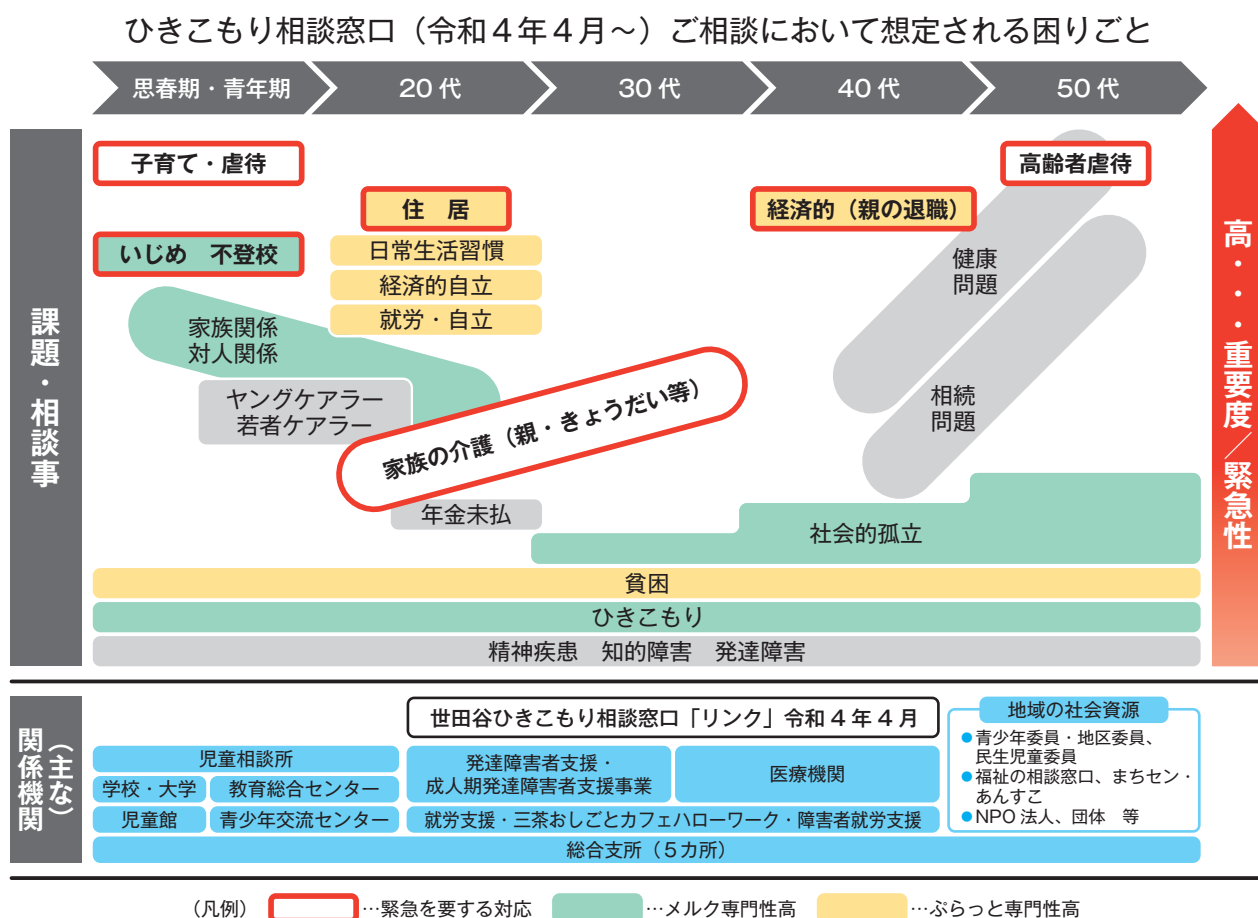


あんしんすこやかセンター （地域包括支援センター）

※以降「あんすこ」と表記

当事者会や家族会、区民からの「わかりやすい窓口が必要」との声を受けて、「ひきこもり相談窓口」の開設検討が始まり、生活全般の困りごとに対応する「ぷらっとホーム世田谷」（以降「ぷらっとホーム」と表記）と生きづらさを抱える若者の支援を心理面で対応していた「メルクマールせたがや」（以降「メルクマール」と表記）という2つの機関が一緒に窓口を運営することとなった。

ひきこもりの相談で想定される困りごとをまとめると以下のような図になり、複合的な課題を抱えている事例が多い。世帯の状況も変化していくため、年齢ごとに対応機関を分けない窓口のあり方が検討されることとなった。



そして、令和4年4月に両機関の強みを活かした相談窓口「リンク」が開設した。

それぞれの機関が持つ専門性はもちろん、就労準備や居場所などの事業も相談者の希望や要件に合うものを活用しながら運営を行っている。

令和5年4月には区民公募、区民投票、審査員審査を経てイメージキャラクター「モーリー」が誕生。「モーリー」の設定は「リンク」の居場所利用者と一緒に考えた。

モーリーは癒しの妖精。普段はモーリーの世界にあり、自身もひきこもっているが、助けが必要なひとがいるとやってくる。そして、話をじっくり聴いてくれる。疲れてしまった時は、モーリー界の家に帰っていくよ。

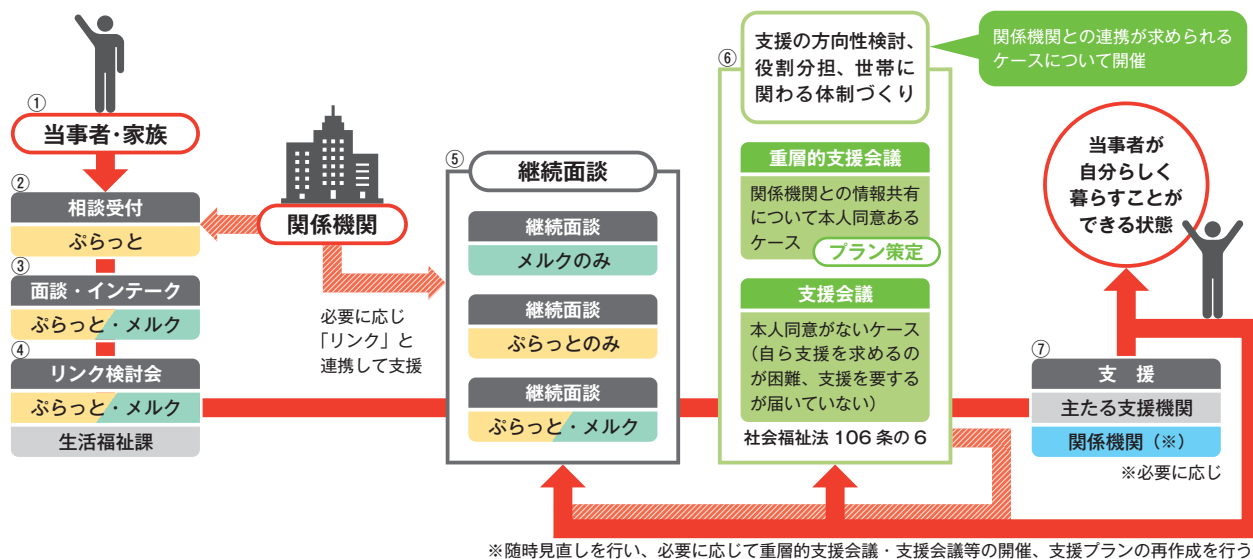


ひきこもり相談窓口「リンク」キャラクター『モーリー』

第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について

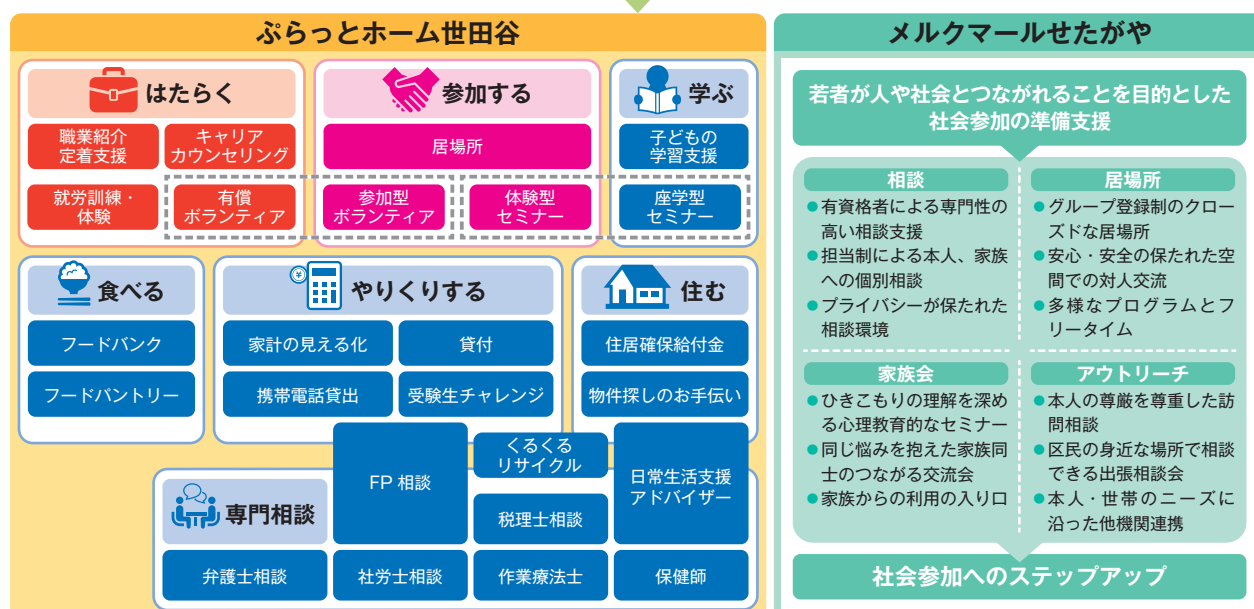
1. 「リンク」の相談窓口の流れ

受け入れから継続支援の検討まで、相談の流れは以下の図の通りとなっている。



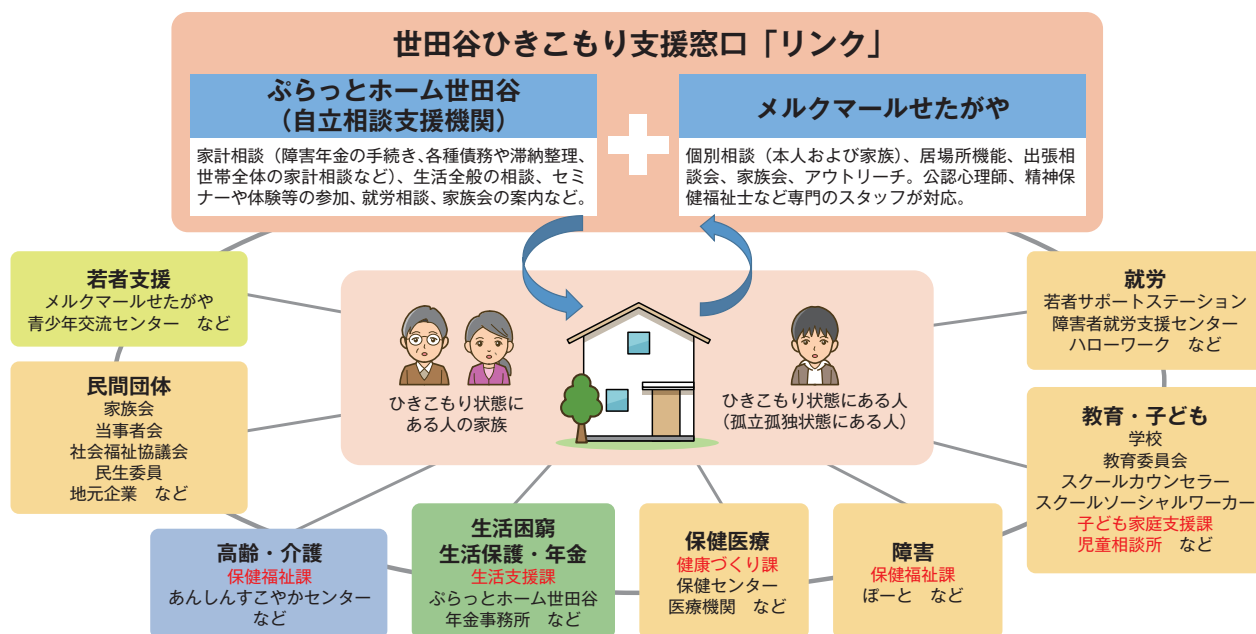
それぞれの視点で強みを活かし、リンクの運営母体となって支援を行っている

- ①当事者、区内家族のみならず、区内に当事者がいる区外家族や関係機関からの相談も受け付けている。
- ②相談受付はぶらっとホーム世田谷が窓口。電話、メール、ホームページの問い合わせフォーマットにて相談を受け、概要を聞いた上でメルクマールと相談日の調整を行う。メールのみでしばらくやりとりをする場合もあり。
- ③インテーク面談はぶらっとホーム、メルクマールの2名体制で行う。主にインテークはメルクマールのスタッフが聞き取りを行うが、経済的な面を含めた生活面はぶらっとホーム世田谷のスタッフが確認をする。
- ④毎週1回、前週に受けた新規案件すべてを区の生活福祉課担当者、「リンク」に関わるぶらっとホーム、メルクマールのすべての担当者が集まる「リンク検討会」で今後の支援方針を確認し検討する。
- ⑤検討会にて当事者が若年で経済的な生活面での不安がないケースはメルクマールが従来の支援を行い、生活面での緊急対応が必要な場合はぶらっとホームがメインで支援を行う。相談につながった当事者のうち9割方はぶらっとホーム、メルクマール双方のスタッフが協働して関わる「リンク」ケースである。
- ⑥支援経過によるプラン策定や終結の確認、モニタリングについては年4回ほど行う「重層的支援会議」で話し合う。多機関での検討や協働が必要な困難なケースは支援会議を開催して多機関が情報共有および検討を行う。
- ⑦支援は前述の図のように多機関が協働しながら支援を継続していく。



2. 支援のネットワーク

「リンク」では、相談者ごとに、世帯が抱える困りごとへの対応や、本人・家族が望む生き方の実現に向け、関係機関がそれぞれの強みを活かして協力しながらサポートしていく体制をつくっていく。



3. 重層的支援協議会

ひきこもり等複雑化・複合化した課題を抱える方やその家族に対する適切な支援を図るため、社会福祉法第106条の6の規定に基づき令和4年4月に設置。

令和6年度は、代表者会議、実務者会議、支援会議の三層で構成し、多機関による連携・協働のネットワークが円滑に稼働するよう以下の通り開催した。

〈重層的支援協議会の構成〉

■ 代表者会議

- ・福祉・保健・産業の各機関の代表者で構成。年2回程度開催。
- ・協議会の運営方針等の環境整備を図るとともに、代表者間の連携を深める。
 - ①生きづらさを抱えた方の支援に関するシステム全体の検討
 - ②実務者会議からの活動状況の報告や評価 等

■ 実務者会議

- ・各機関の実務者による研修や事例検討会。2部会。
- ・ひきこもり・就労支援部会、8050支援部会
- ・各機関の事例を共有・検討、実務者の知識向上と関係機関間の連携強化を図る。
 - ①定例的な情報交換 ②支援ケースに関する状況確認
 - ③支援会議等であがった課題等に関する検討 等

■ 支援会議

- ・本人同意がないケースについて、社会福祉法第106条の6に基づき、参加する支援者に守秘義務を設けた会議体。随時開催。
- ・複雑化・複合化した課題のあるケースに対し、支援者間で情報共有を行うとともに、課題の確認、支援方針の策定、役割分担を検討し、連携・協働して支援を行う。
- ・支援者は、すでに関わりがあるだけでなく、今後関わりが求められる支援者も含む。
 - ①支援ケースの状況把握や問題点の確認
 - ②支援方針の確立と役割分担の決定 ③実際の支援方法の検討 等

4. 「リンク」窓口概要

【窓口受付曜日・時間】

月曜日～金曜日（祝日、年末年始は除く） 9時～17時

【対象者】

年齢問わず。当事者、家族、関係者、関係機関

【リンク担当者】

ぷらっとホーム世田谷4名、メルクマールせたがや4名



第二章 事業実績

第1節 利用者実績

1. 全体
2. 令和6年度相談者
3. 令和6年度当事者
4. アウトリーチ件数
5. 相談者・当事者利用サービス
6. その他データ

第2節 開催会議・多機関連携

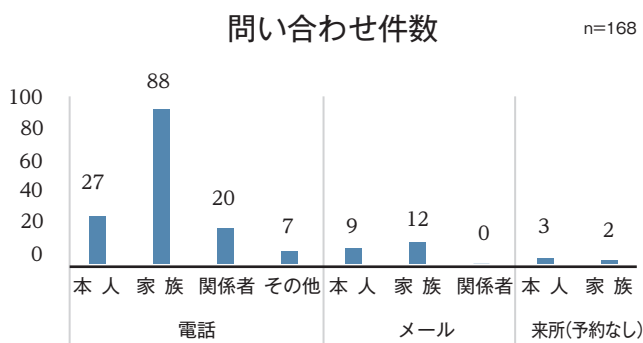
1. 重層的支援協議会・部会
2. 重層的支援会議（リンク検討会を含む）
3. 支援会議
4. 連携機関一覧

第1節 利用者実績

1. 全体

①問い合わせ件数

令和6年度問い合わせがあった件数
(相談につながっていない件数を含める)



※「その他」は、当事者と関係ない「リンク」事業への問い合わせ

②受入れ件数（地域別）

※「受入れ件数」は、インテーク・相談につながった件数

支所	継続者	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	R6 受入合計	累計
世田谷	92	3	3	3	1	5	3	1	4	5	2	2	1	33	125
北沢	59	1	1	2	0	0	1	1	3	4	0	1	0	14	73
玉川	61	4	1	2	4	4	3	2	3	0	2	3	2	30	91
砧	52	3	2	2	3	1	1	1	1	3	3	2	3	25	77
烏山	43	2	3	0	1	1	2	2	0	0	3	0	3	17	60
合計	307	13	10	9	9	11	10	7	11	12	10	8	9	119	426

③相談・支援の実績（のべ数）

方法	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
面談	108	113	115	117	81	100	105	97	107	94	84	101	1,222
オンライン面談	2	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	1	8
メール	73	57	71	78	63	79	80	71	66	59	55	34	786
電話	76	92	112	111	104	106	88	111	103	64	57	51	1,075
合計	259	263	298	307	249	285	274	279	277	217	196	187	2,708

POINT

受入れ件数は、単年度では119件と前年度の146件を下回ったが、相談・支援の全体の問い合わせ件数は349件増となった。「リンク」開設前の令和3年度から受け入れてきた相談者が累積しており、相談・支援が継続している結果と言える。相談の方法別では、面談1,222件、メール786件、電話1,075件といずれも前年度より増加している。特に外出等に困難を抱える相談者も多いため、面談だけでなく、メールや電話、オンライン相談など多様な方法を用い、相談が継続できるように工夫をしている。その一方で、顔が見えない電話・メールでの相談は、意思疎通が図りづらく、通常の面談以上に対応に配慮を必要とするため、相談員の精神的・時間的負担となっている。

POINT

全体の問い合わせ件数は、昨年度微増の168件。相談者の内訳は本人・家族からの問い合わせが84%と前年度比20%増加となった。当事者への「リンク」の周知が進んだと考えられる。「リンク」への最初の問い合わせは、電話が多く、次いでメールとなっている。問い合わせは相談者にとって相談したい気持ちと行動が整う大切な瞬間であると捉え、その後のインテーク・相談に続くよう、慎重かつ丁寧に対応している。

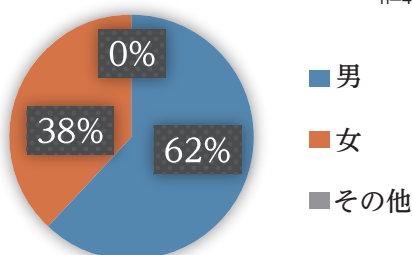
2. 令和6年度相談者

1) 当事者

①来所者の性別と年齢（当事者）

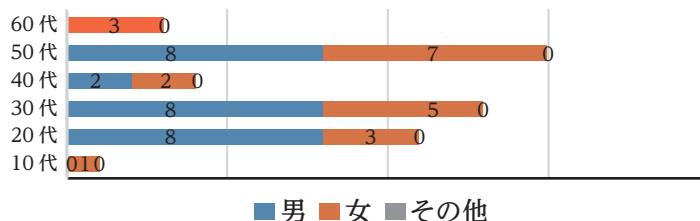
当事者性別

n=47



当事者年齢別

単位：人



POINT

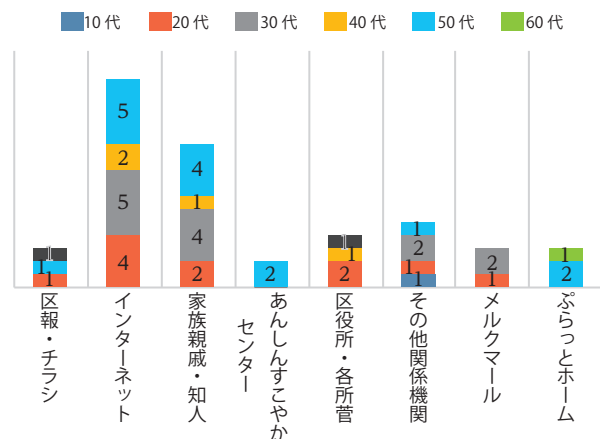
相談に訪れた当事者の性別は男性が全体の6割超と優位だが、40代・50代では性差は見られなかった。年齢分布では、昨年度に比べ50代が最も多く3割を占め、当事者の高齢化が見られた。一方、若者（10～30代）と中高年（40～60代）がほぼ同数であった。

	男	女	その他	R6 合計
10代	0	1	0	1
20代	8	3	0	11
30代	8	5	0	13
40代	2	2	0	4
50代	8	7	0	15
60代	3	0	0	3
合計	29	18	0	47

②相談のきっかけ

相談のきっかけ（来所当事者）

n=47



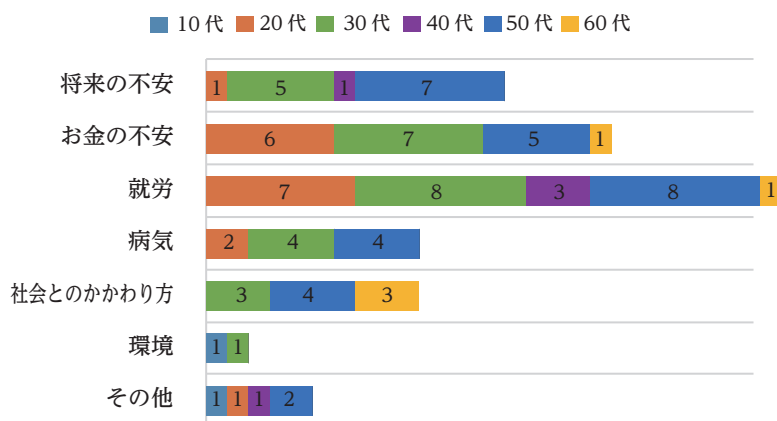
POINT

相談のきっかけは、インターネットが全年代で最も多く、次いで家族親戚・知人がきっかけとなっている。インターネットや広報・チラシを合わせると40%を超えた。当事者が自ら情報を得てつながった件数が昨年度より増えている。また、メルクマールやぷらっとホームの相談者が、「リンク」の支援が必要となりつながるケースは各々3件あった。

	区報・チラシ	インターネット	家族親戚・知人	あんしんすこやかセンター	区役所各所管	その他関係機関	メルクマール	ぷらっとホーム	合計
10代	0	0	0	0	0	1	0	0	1
20代	1	4	2	0	2	1	1	0	11
30代	0	5	4	0	0	2	2	0	13
40代	0	2	1	0	1	0	0	0	4
50代	1	5	4	2	0	1	0	2	15
60代	1	0	0	0	1	0	0	1	3
合計	3	16	11	2	4	5	3	3	47

③相談主訴（複数回答）

相談主訴（来所当事者）

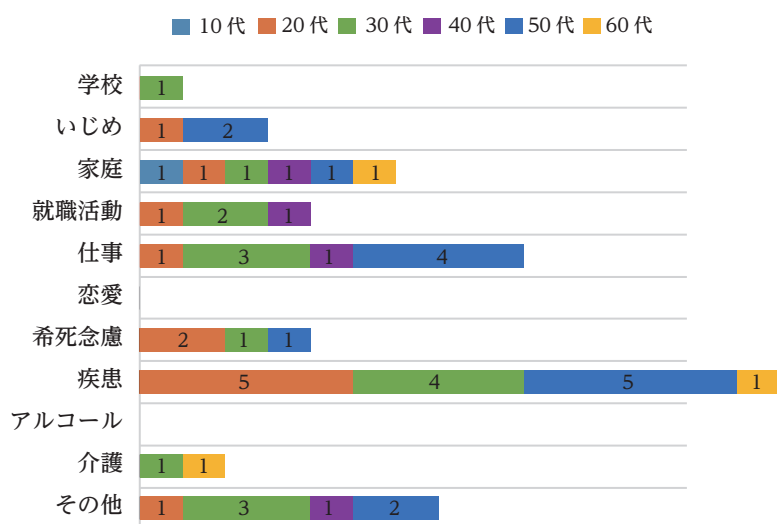


POINT

今年度は「就労」が一番多く、昨年度最も多かった「お金の不安」を大きく上回った。実際に、本人の希望により面談と並行して就労相談も行っているが、心身ともに就労への準備が整っているとは限らず、「就労」までは、就労準備支援事業で生活リズムを整えたり、職場見学などでスモールステップを踏み、心の揺らぎにも対応しながら、慎重に相談を進めている。

④ひきこもり要因（複数回答）

ひきこもり要因（来所当事者）



POINT

20～50代では疾患がひきこもりの要因となったケースが多くなっている。次いで、仕事や家庭が要因となっている。様々な要因が重なって疾患の発症につながったと思われるケースも多く、当事者が抱える問題を複雑化させている。

⑤ひきこもり期間

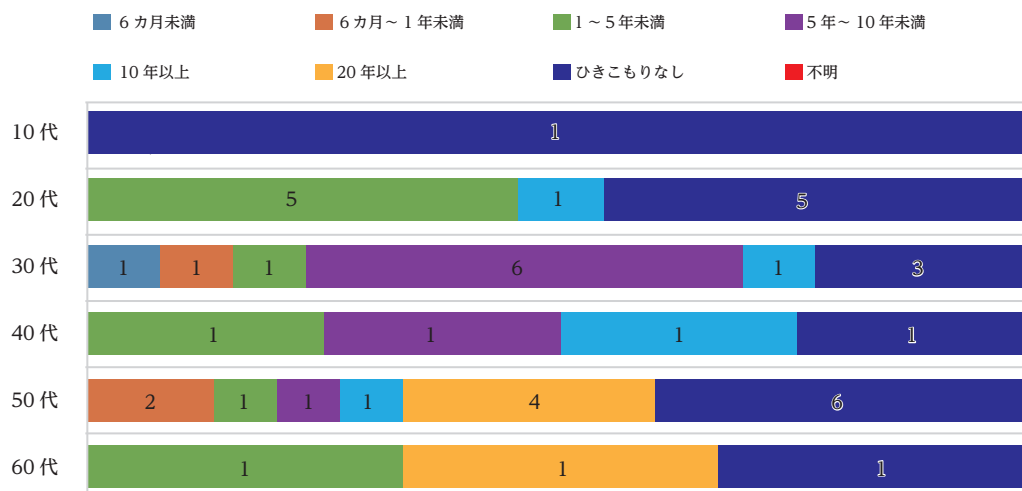
単位：人

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
6カ月未満			1				1
6カ月～1年未満			1		2		3
1～5年未満		5	1	1	1	1	9
5年～10年未満			6	1	1		8
10年以上		1	1	1	1		4
20年以上					4	1	5
ひきこもりなし	1	5	3	1	6	1	17
不明							0
合計	1	11	13	4	15	3	47

ひきこもり期間（来所当事者）

単位：人

n=47



POINT

ひきこもり期間が1年に満たない方は4件、そのほかは、ひきこもり期間が年単位となり、特に、50・60代では20年以上に及ぶケースもある。ひきこもり状態は、10～20代からは不登校・就職活動、30～40代では離職、介護等が要因となって長期化するケースが見られる。

「リンク」では、何らかの生きづらさを抱え、社会との接点が希薄であったり、社会との接点を持ちづらいために、日常生活に困りごとを抱えている方も対象としており、「ひきこもりなし」の方17人にも対応した。

困りごとを抱えている方が早期に支援がつながること、さらに支援が途切れないことの必要性を感じている。

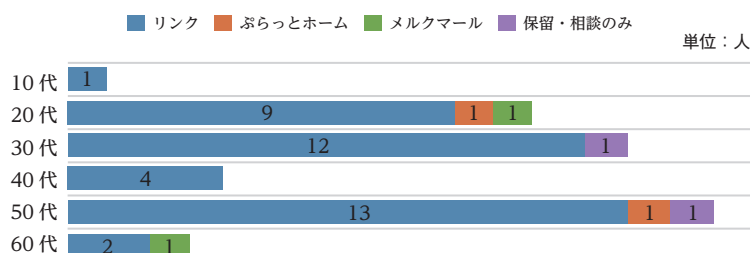
※「ひきこもりなし」とは、近所のコンビニには出かける、趣味の用事の時には外出するが、他者と交わらない（社会とつながっていない）、準ひきこもりの状態をいう。

⑥当事者年齢別／支援機関属性

単位：人

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
リンク	1	9	12	4	13	2	41
ぷらっとホーム		1			1		2
メルクマール		1				1	2
保留・相談のみ			1		1		2
合計	1	11	13	4	15	3	47

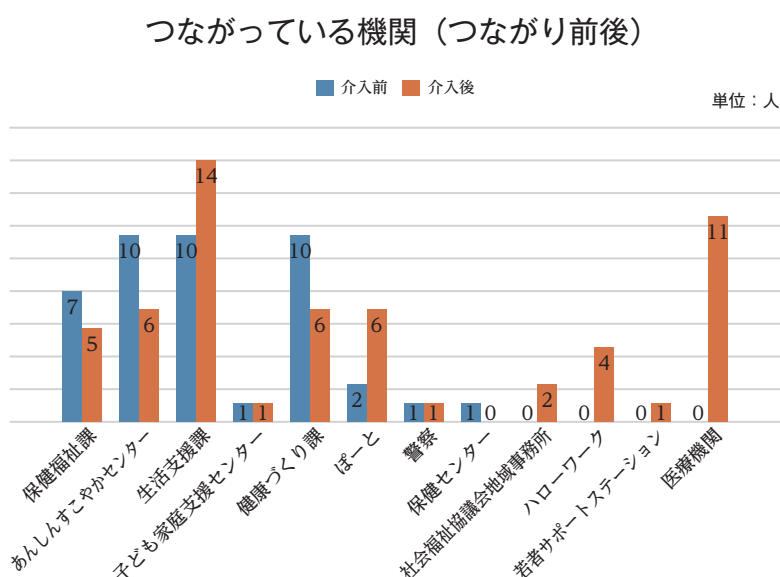
当事者年齢別 / 担当支援機関（来所当事者）



POINT

「リンク」では主としてメルクマールが心理面を、ぷらっとホームが生活面を担当し両面から支援をしている。ケースによっては、インテークの結果、心理面中心の支援でメルクマールが、反対に生活面中心の支援でぷらっとホームが各々単独で支援したケースが2人ずつあった。

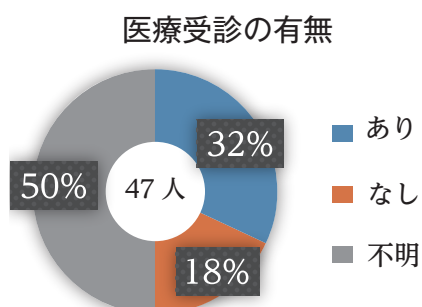
⑦つながっている機関（つながり前後）



POINT

保健福祉センター等の福祉相談につながり、「リンク」を紹介されたと思われる。「リンク」につながった後は、本人の生活支援につながる生活支援課やハローワーク、医療機関などへつながりが広がっていることがわかる。

⑧医療受診の有無



POINT

来所した当事者で、何らかの心身の不調を抱えるケースが多いものの、医療につながった経験があると明らかになったケースは、3割であった。未受診の原因としては、家族や当事者が医療の必要性を感じていなかったり、受診科の負担や医療機関の選択が難しいことが要因として考えられる。

診断がついているものの中では、うつ病、統合失調症、双極性感情障害が多い。ASD、ADHDなどの発達障害、境界知能、アルコールや薬物など依存症も含まれ多岐にわたっている。

診断がないために、長期間に亘り必要な治療や支援につながっておらず、状況が悪化しているケースが見受けられる。

⑨「リンク」支援後の制度対応でのサポート

a) 制度対応（生活保護以外）

障害者手帳取得	4件	愛の手帳1件、精神保健福祉手帳3件
障害年金取得	1件	

POINT

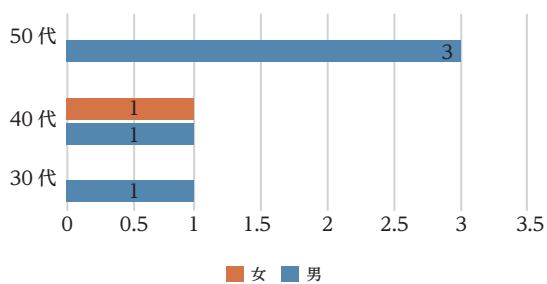
生活を安定させるための必要な支援や生活費の確保策として、当事者と一緒に考えながら、障害者手帳の取得をして福祉サービスの利用や障害年金の申請につなげた。手続きの際は、障害者手帳の取得では、通院同行や書類手続きの準備を支援し、また年金申請の際は、年金事務所への同行や社会保険労務士との相談援助を含めて行っている。

b) 生活保護へのつなぎ

生活保護へのつなぎ

単位：人

n=6



POINT

生活保護につないだケースは6件だった。

5件は入学、就職で上京して独居を開始、仕送りで生活をしていたが、いずれも高齢の親からの経済的支援がなくなり、生活費が必要になったケースである。また3件は受診費用が負担できず未受診であった。

2) 家族・親族

①来所者の属性と年齢

単位：人

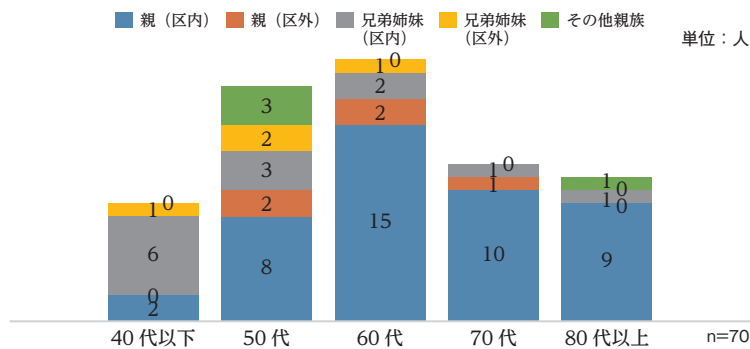
	親 (区内)	親 (区外)	兄弟姉妹 (区内)	兄弟姉妹 (区外)	その他 親族	合計
40代以下	2	0	6	1	0	9
50代	8	2	3	2	3	18
60代	15	2	2	1	0	20
70代	10	1	1	0	0	12
80代以上	9	0	1	0	1	11
合計	44	5	13	4	4	70

POINT

親からの相談が全体の7割で最も多い。40代～50代で親が現役のうちに相談に来た場合は、経済的余裕があり生活課題にも段階を踏んで対応できることが多い。60代以上になると親自身にも経済面、身体面の課題が生じてくることもあり、ひきこもりの当事者だけでなく、世帯課題への支援となることが多くなっている。

区内在住者の割合は、親、兄弟を合わせると全体の8割を超えた。区内で「リンク」の周知が進んだと思われる。

来所者の属性と年齢



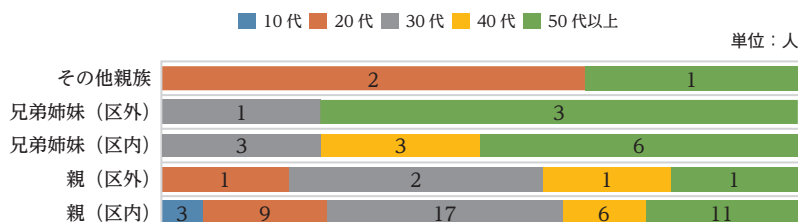
②当事者年齢別／相談者属性

	親 (区内)	親 (区外)	兄弟姉妹 (区内)	兄弟姉妹 (区外)	その他 親族	合計
10代	3					3
20代	9	1			2	12
30代	17	2	3	1		23
40代	6	1	3			10
50代以上	11	1	6	3	1	22
合計	46	5	12	4	3	70

POINT

当事者の年代を問わず、親からの相談が多い。当事者が10代20代のうちは、兄弟姉妹の関わりがなく、30代以上になると、兄弟姉妹の割合が増えている。
当事者が年齢を重ね、親も高齢となり、親亡き後の役割を機に兄弟姉妹が相談に動き始めたと考えられる。

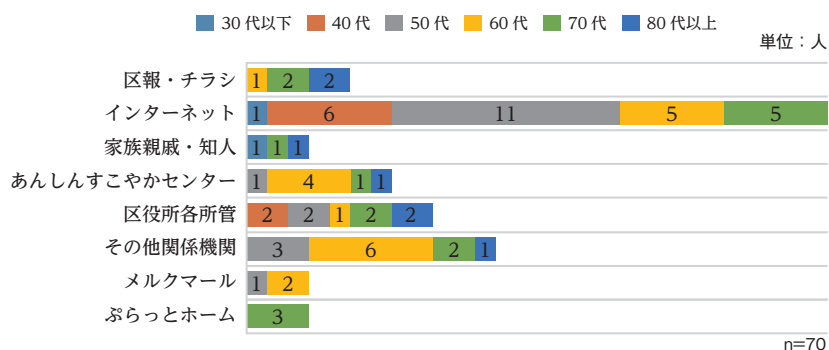
当事者年齢別／相談者属性（家族・親族）



③相談のきっかけ

	区報・ チラシ	インター ネット	家族親戚・ 知人	あんしん すこやか センター	区役所 各所管	その他 関係機関	メルク マール	ぷらっと ホーム	合計
30代以下		1	1						2
40代		6			2				8
50代		11		1	2	3	1		18
60代	1	5		4	1	6	2		19
70代	2	5	1	1	2	2			13
80代以上	2		1	1	2	1		3	10
合計	5	28	3	7	9	12	3	3	70

相談のきっかけ



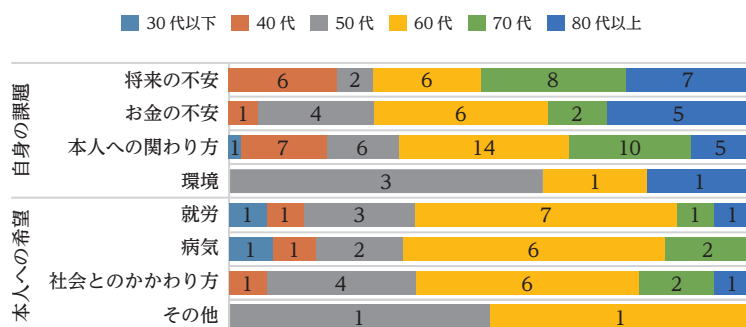
POINT

インターネットが全体の4割と昨年度よりさらに増加している。「リンク」のホームページの情報をより効果的に発信していく必要があると感じている。60代以上では、あんしんすこやかセンター、区役所など関係機関での情報提供や紹介が相談のきっかけとなっている。家族が相談のタイミングを逃さないように、「リンク」が関係機関と日ごろから連携を良くしておくことが大切だと感じる。

④相談の主訴

	自身の課題				本人への希望			
	将来の不安	お金の不安	本人への関わり方	環境	就労	病気	社会とのかかわり方	その他
30代以下			1		1	1		
40代	6	1	7		1	1	1	
50代	2	4	6	3	3	2	4	1
60代	6	6	14	1	7	6	6	1
70代	8	2	10		1	2	2	
80代以上	7	5	5	1	1		1	
合計	29	18	43	5	14	12	14	2

相談の主訴（家族・親族）

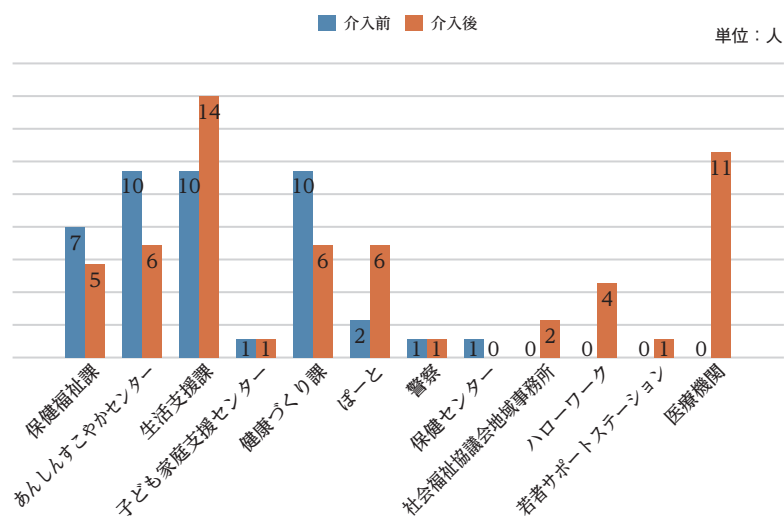


POINT

家族・親族の年齢にかかわらず「本人への関わり方」「将来の不安」は共通の課題と言える。「将来の不安」には、ひきこもりの子どもの将来、ほかの子どもへの影響、自身の老後の生活など多岐にわたる不安が含まれている。本人に対しては、「就労」と「社会とのかかわり」が多く、本人が社会と何らかのつながりを持って生活をしてほしいという希望があることがわかる。「病気」では通院への希望が聞かれた。

⑤つながっている機関（つながり前後）

つながっている機関（つながり前後）



POINT

「リンク」につながる前に相談した機関では、身近な地域の相談窓口である「あんしんすこやかセンター」が最も多くなっている。心身の不調を抱えることが多いことから、健康づくり課とつながっていることがわかる。昨年度同様、緊急時対応で警察とつながったケースも一定数あり、対応の難しさを反映している。介入後は、支援に必要な機関へつないだため、機関が増えている。

3) 関係機関からの相談

	相談機関	相談対象者年代				
		10代	20代	30代	40代	50代以上
区役所	保健福祉課					
	健康づくり課					
	生活支援課		1			
	子ども家庭支援センター					
	その他					
地域	あんしんすこやかセンター					
	ぽーと					
	地域社会福祉協議会事務所					
	民生委員児童委員					
	その他					1

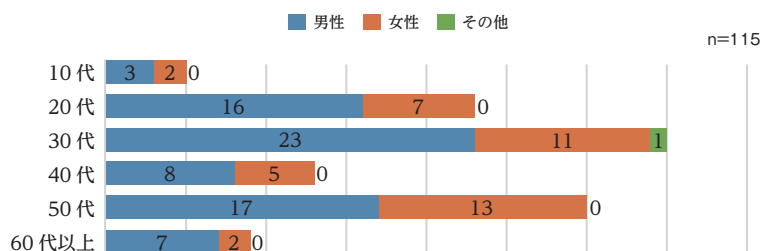
POINT

相談機関からの相談の場合は、「リンク」で相談を受けた後、相談機関に本人・家族へ「リンク」について情報提供を行ってもらい、「リンク」が直接本人・家族とつながれるようにしている。相談窓口が増えるたびに、当事者が状況を何度も説明しなければならない、という負担感を減らすためにも、関係機関とタイミングを合わせながら、当事者やご家族と直接つながることができるように心がけている。結果として、関係機関だけとつながったケースは2件であった。

3. 令和6年度当事者

①性別と年齢【当事者】

令和6年度把握した当事者の属性と年齢



POINT

「リンク」で把握した当事者は、115人、男性が6割以上を占めている。男性では30代、女性では50代が最も多くなっている。10代～30代と40代以上で性別を見ると、10代から30代の男性が少し多いものの、おおむね差異はなかった。様々な年代からの相談が多いことがわかる。

	男性	女性	その他	合計
10代	3	2	0	5
20代	16	7	0	23
30代	23	11	1	35
40代	8	5	0	13
50代	17	13	0	30
60代以上	7	2	0	9
合計	74	40	1	115

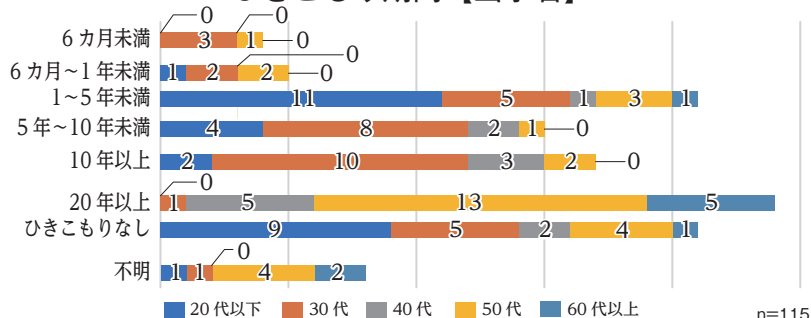
②ひきこもり期間【当事者】

	20代以下	30代	40代	50代	60代以上	合計
6カ月未満	0	3	0	1	0	4
6カ月～1年未満	1	2	0	2	0	5
1～5年未満	11	5	1	3	1	21
5年～10年未満	4	8	2	1	0	15
10年以上	2	10	3	2	0	17
20年以上	0	1	5	13	5	24
ひきこもりなし	9	5	2	4	1	21
不明	1	1	0	4	2	8
合計	28	35	13	30	9	115

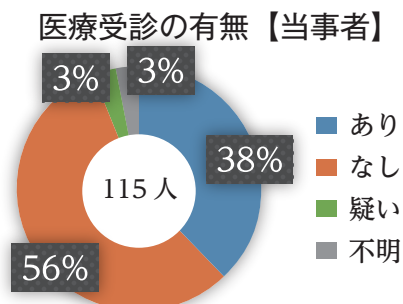
POINT

ひきこもり期間が20年以上、が最も多く、10年以上と合わせると全体の1/3となり、深刻な状態が浮かび上がっている。30代以上になると10年以上が増え、20代、30代からひきこもりが始まっていることがわかる。令和6年度の特徴として、60代の当事者が前年度の倍の9名と増え、ひきこもり状態ではないものの、孤立孤独の問題で関わった方が21人と増えている。

ひきこもり期間【当事者】



③医療受診の有無【当事者】



POINT

「リンク」が把握した当事者（来所した当事者含む）のなかで医療受診をしている割合が38%と前年度を下回った。医療の必要性を感じていないことや、診療科や医療機関の選択の難しさなどが、受診につながらない要因と考えられる。診断名としては、多い順にうつ、統合失調症となっている。また、様々な症状を含む発達障害が多くなっている。

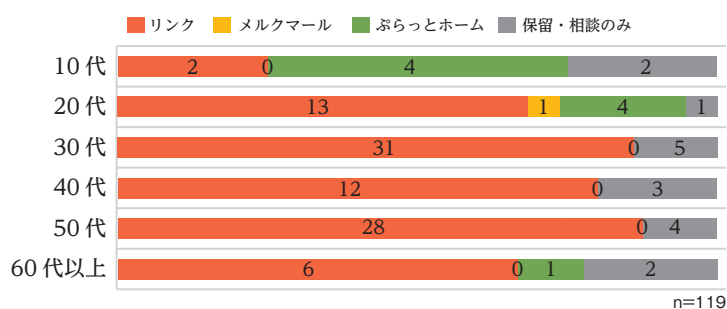
〔診断名〕

うつ病、双極性感情障害、適応障害、強迫性障害
 注意欠如多動症（ADHD）、自閉スペクトラム症（ASD）
 統合失調症、社交不安症、てんかん
 醜形恐怖症、アルコール依存症、潰瘍性大腸炎、片麻痺
 ※複数回答あり

④当事者年齢別／支援機関属性【当事者】

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
リンク	2	13	31	12	28	6	92
メルクマール	0	1	0	0	0	0	1
ぷらっとホーム	4	4	0	0	0	1	9
保留・相談のみ	2	1	5	3	4	2	17
合計	8	19	36	15	32	9	119

当事者年齢別／支援機関属性



POINT

リンク検討会の結果、当事者並びに保護者の年齢にかかわらず、83%が「リンク」もしくは「ぷらっとホーム」での支援が多かった。世帯にひきこもり状態の方がいることで、精神的な問題とともに日常生活に困りごとが生じていることを示している。令和6年度は、支援方針の見極めに時間がかかったケースが増えた。

4. アウトリーチ件数

令和6年度訪問と同行の件数および内容（件） ※令和6年度に支援を行った本人・家族対象

	本人	家族	合計
訪問	66	11	77
同行	139	8	147
合計	205	19	224

対応者内訳	リンク訪問	56
	ぷらっとホームスタッフのみ	152
	メルクマールスタッフのみ	16

【訪問内容】

新規面談、外出困難な方への継続面談、居住環境の確認、食糧支援、訪問診療の立ち合いなど

【同行内容】

出張所手続き、保健センター相談、心身障害者福祉センター相談、各区役所窓口手続き、ぽーと相談、すきっぷ相談、あんしんすこやかセンター相談、メンタルクリニック相談、転宅支援（内見含む）、弁護士相談、法務局手続き、就労先、就労継続支援A・B型事業所など

POINT

来所が難しい方への支援として訪問で面談を行うことが多く、「リンク」としてぷらっとホームとメルクマールのスタッフが各1名入り二人体制で行っている。新規面談の場合は、相談者である家族が高齢で外出が難しければ自宅、近隣までの外出が可能なケースであれば、自宅近くのまちづくりセンターにあんしんすこやかセンターの職員が同行して行うことが多い。また、外出は出来ないが訪問を同意してくれた当事者への訪問面談も行っている。

同行は当事者のニーズに応じて様々な機関にぷらっとホームの支援員のみが同行することが多い。内容は、通院同行、障害年金や後見制度についての相談、作業所見学など多岐にわたる。

5. 相談者・当事者利用サービス

1) 居場所利用状況（むすびば）

▶ むすびばとは

ぷらっとホームとメルクマールが合同で開催した居場所。毎月1回、第2金曜日の午後、メルクマールの活動ルームで開催した。

▶ 内容

ぷらっとホームとメルクマールの支援員が各1名入り、参加者と一緒に円になってサイコロトークを行う。テーマは、季節の話題や趣味、関心事などがあり、フリートークもOK。

▶ 全体の流れ

- ① 集合してアイスブレイクでメンバーの緊張をほぐす。
- ② 休憩をはさみながら順番にサイコロをふってその番号のテーマに沿って話をする。
- ③ 最後に感想をシェアする。

▶参加状況

参加者年代	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
20代													0
30代	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
40代	2	2	2	1	3	1	2	2	2	2	2	2	23
50代	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	11
合計	4	4	4	3	4	3	4	4	4	4	4	4	46

▶参加者の感想・意見

- ・定期的に開催されるので自分の予定に入れている。
- ・気楽に参加できるところが気に入っている。
- ・外出するきっかけになった。
- ・可能であれば、今後もずっと参加したい。



▶今後の展開

令和7年4月からはメルクマール主催で継続していく。テーマに沿って話をしたい、フリートークで話したいなど、一人一人ニーズの違いはあるが、選択肢を幅広く持ち、和やかな雰囲気の中で参加者が自由に発言できる場所を提供していく。

2) ぷらっとホーム事業利用状況

相談者年齢	※ 就労 準備	※ 就労 訓練	※ 就労 支援	作業 療法士	保健師 相談	社会保険 労務士 相談	ファイナンシャル プランナー相談		弁護士 相談	転宅 支援	日常生活 支援アド バイザー
							家族	当事者			
10代											
20代			5			1	1		2	1	
30代	2		3			1				3	
40代	1		5		1					2	1
50代	2	1	13			3	3			6	4
60代以上									1	1	
合計	5	1	26	0	1	5	4	0	3	13	5

※ぷらっとホーム世田谷は生活困窮者自立支援センターであるため、「就労準備」および「就労訓練」は生活困窮者自立支援法上の「就労準備事業」「就労訓練事業」を利用した件数

※「就労支援」は同じくぷらっとホーム世田谷の就労支援担当者が対応している件数

POINT

経済面の相談では、家族がファイナンシャルプランナー相談を利用した。転宅支援では、家族との生活から一人暮らしに移行するために利用するケースが多く、年齢層は多岐にわたった。働いていない状況での物件探しは難しいが、協力してくれるいくつかの不動産会社と物件探し、内見同行、契約までのフォローを一緒にきめ細やかに行った。

就労支援では、幅広い年齢層での利用があったが、特に50代の当事者の利用が多い。就労経験がほとんどないケースでも、就労支援担当との協働による丁寧な支援で就労に至ることが出来た。就労開始後の就労定着支援も必ず行っている。

ぷらっとホーム独自の取り組みである「日常生活支援アドバイザー」の派遣については、前年度より利用が増加した。日常生活の自立に向け、ごみ捨て、片付け、自炊や生活習慣の改善等、個別のケースに応じたサポートが行われた。転宅支援とセットで行われることもある。

3) 就労準備と外部活動

令和6年度に「リンク」から生活困窮者自立支援法上の就労準備支援につながった人は5名であった。ぷらっとホームでは、就労に向けて活動する利用者に毎月様々なプログラムを提供しているが、ハードルが高く継続的に参加するまでにはいかないという人も多い。一方で、社会と緩やかにつながっていきたいという要望はある。

そのため、就労準備プログラムの中の「ぷらっとカフェ ガリレオ」と「神社落ち葉掃きボランティア」を一部開放して、就労準備プログラムを利用していない「リンク」の利用者に参加してもらっている。利用者にはリピーターが多く、人気も高い。

外部活動としては、「居場所カフェ コモリナ」での女子会、地域社協で募っている地域の農園活動への参加やサロンでのボランティアなど、地域の協力を得ながら体験の幅を広げている。

■ぷらっとカフェ ガリレオ

【内容】毎週火曜日 12 時～ 14 時、三軒茶屋駅近くの漫画の図書館で一人で好きな漫画や雑誌に没頭できる。まずは定期的な外出を心がけたいという人へのプログラム。

【参加状況】令和6年度は、長期間ひきこもり状態であった方々の参加もあった。定期的な利用を希望する方が多い。

■神社落ち葉掃きボランティア

【内容】朝9時に現地に集合して終了は11時。毎月1回、金曜日には「リンク」参加者限定の参加日が設けられている。(それ以外の金曜日はぷらっとホームの就労準備プログラム)。謝礼金あり。

【参加状況】雨天及び猛暑で中止となった月もあったが、延べ8人の方が参加した。「もくもくと自分のペースで作業できた」「屋外での活動なので解放感がある」という感想が聞かれた。

■居場所カフェ コモリナ 女子会

【内容】ひきこもり当事者が立ち上げた下北沢の「居場所カフェ コモリナ」と共同開催をした女子会。居場所の一室を使用した自由参加の女子会。各自が最近気になっていることを話したり意見交換したり、おしゃべりと情報交換の場になった。

【参加状況】「リンク」を利用されている方や外部の方、「リンク」の支援員が参加した。単発企画であったが、定期的に開催してほしいとの声が聞かれた。

■地域社協のサロンでのボランティア

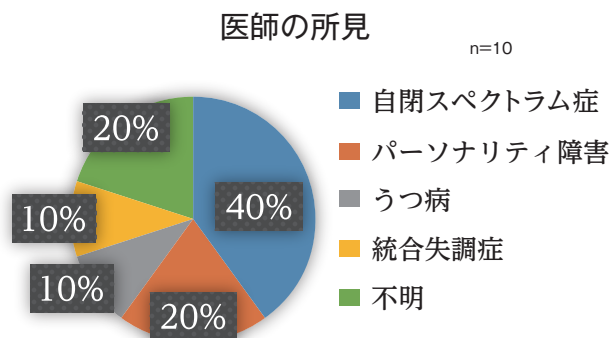
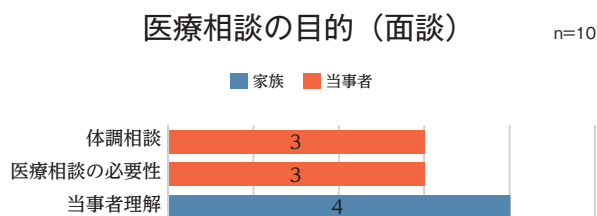
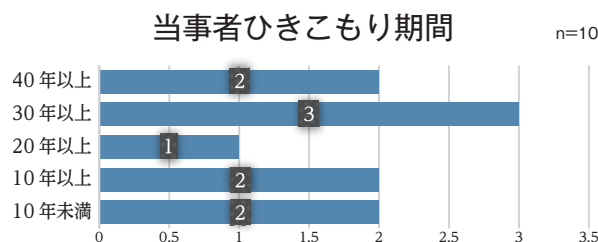
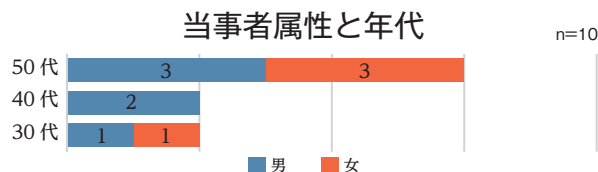
【内容】地域社協が関わっているサロンの準備や片づけ、スマホ操作サポートのボランティアを、活動の場を少しずつ広げたいという方に対して、ご紹介している。

【参加状況】地域社協スタッフのサポートもあり、「外での活動に自信を持てた」という感想が聞かれた。

4) 医療連携

医師と、事例相談・相談者面談の2つのパターンを有効に活用して医療連携を行っている。
面談した相談者（当事者6件・家族4件）の傾向は以下のグラフの通り。

医療連携件数		
事例相談	16件	
面談数	12件（2件は2回面談）	
（面談内訳）	当事者	6件
	家族	4件



▶当事者の反応

- ・治療上のことで、主治医に質問して良いのかわからず迷っていたことを相談した。アドバイスを貰った通りに聞いたら、主治医も理解してくれて、納得のいく治療方針になった。

▶家族の反応

- ・関わり方の助言通りに対応したところ、当事者の反応との関係に良い変化があった。

▶福祉の窓口で医師面談を行う効果

福祉的・心理的側面に加え、医療的な視点が入ることで、当事者の全体像を多角的に捉え、検討することができるため、支援の幅が広がると感じている。

【医師より】

「ひきこもりの維持要因として精神疾患が疑われる場合、精神科医が多職種チームに加わることは、支援の多角的アセスメントと深みのある介入に貢献できると考えています。特に医療機関とのつながりを持っていない当事者に対し、医療相談は生活に近い場所でさりげなく医療と出会う機会を提供します。精神科医による丁寧な診立てと治療法の説明によって、当事者の医療へのスティグマを軽減し、社会復帰を促進する可能性があります。」

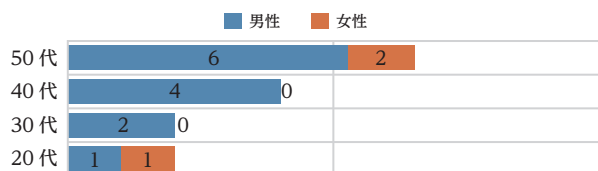
5) ため込み症リスト結果

「リンク」の相談の全体の中で家の中に物が多く日常生活に支援を要する方の傾向（インタビューから集計）

▶集計数 16 名（内訳 男性 13 名、女性 3 名）

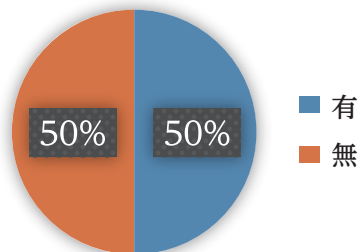
属性と年齢

n=16



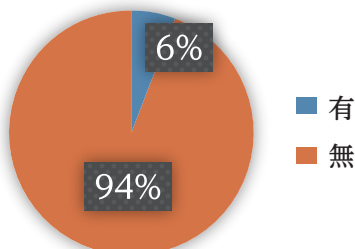
家族同居

n=16



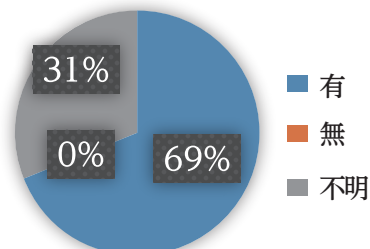
身体疾患

n=16



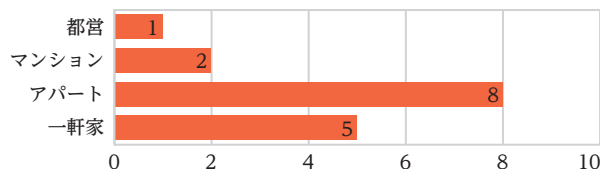
精神疾患

n=16

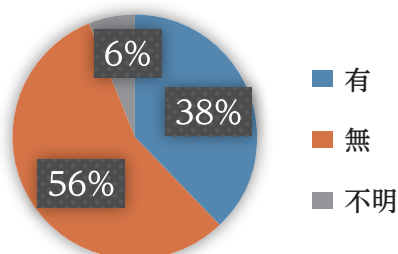


住居形態

n=16



荷物による困りごと



▶荷物の内容

紙類や書類、生活用品、衣類が多かった。

▶溜めるきっかけ

69%が、一人暮らしを始めたことなど環境の変化や、家族や当事者の体調の変化などをあげている。

課題

何らかの精神疾患を抱えており、荷物による困りごとを感じていないケースが多い。安定した日常生活のための支援につなげていけるように、より具体的な全体像の把握を行い、支援方法について、多職種間で検討していく。

6) ぷらっとホーム就労支援

「リンク」から就労支援につながる方の増加にともないチームを結成。「リンク」専門のキャリアカウンセラー2名、専門の求人開拓員1名、PSW（精神保健福祉士）がチームを組み、個別就労支援プログラム（IPS=Individual Placement and Support 働きたい希望を大切に、一人ひとりに合う仕事を探して援助する援助付き雇用）の手法も取り入れ一体型支援を開始した。

▶ 支援の流れ

＜キャリアカウンセラー＞

- ① 「リンク」の担当者からぷらっとホームの就労担当に、本人の希望を伝え、面談の日程調整
- ② 「リンク」の担当者とキャリアカウンセラーで事前の打ち合わせを行い、情報の共有と方向性を確認
- ③ 初回面談は「リンク」担当も同席し安心した環境づくり
- ④ 次回以降の面談は「リンク」の担当者と連携しながらカウンセリング
- ⑤ 支援者の意向をもとに「リンク」の担当者と個別のケース検討会

＜求人開拓員＞

- ① キャリアカウンセラーと連携しながら働き方、場所、職種などを再度確認しながら個別に独自の求人開拓
- ② 体験就労から始めるケース、体験就労しないで就労するケースを相談
- ③ 体験就労の同行、面接同行支援、定着支援、定期的に就労先企業へ連絡等のサポート
- ④ 状況に応じて定着支援を実施
- ⑤ IPS（個別就労支援プログラム）的な取組

＜共有・検討＞

- ① 「リンク」の担当者に都度報告
- ② 定期的な情報交換
- ③ 課題に関する検討等
- ④ 支援方法の検討等
- ⑤ 役割分担の共有

▶ 支援実績

支援受入：25名 就労決定：17名

うち1名が就労訓練事業、1名が一般企業での就労体験を経て一般雇用の採用となった

▶ 就労支援を受ける当事者が抱える主な課題

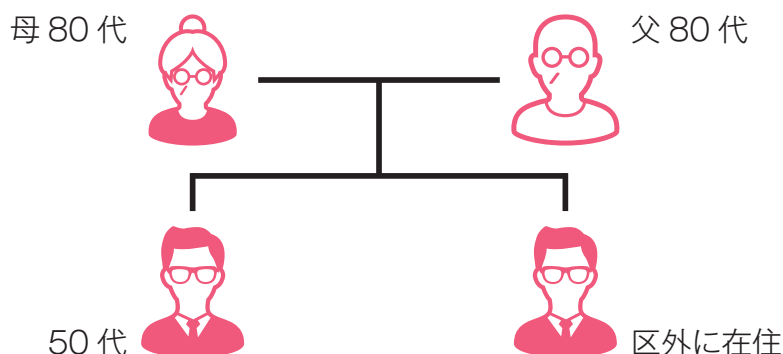
- ① 本人も家族も就労への焦りや不安がある
- ② コミュニケーションが苦手
- ③ 就労経験が少ないことによる自己肯定感の低さ

▶ 就労支援チームが大事にしていること

- ① 当事者や家族の気持ちを大事にしながら支援していく
- ② 「リンク」と役割分担しながら当事者が就労することにより自立ができ安定した生活ができるように連携した支援を行う
- ③ 当事者との信頼関係を大事に支援していく

1. 30年間就労していなかったが、就労訓練後に雇用になったケース

（事例の概要）兄弟のすすめで「リンク」を知り来所。道で高齢者の手助けをしたことがきっかけで高齢者を支援する仕事を希望。短時間就労から始め、社保加入を目指している。



〈支援状況〉

関係機関	「リンク」、ぷらっとホーム就労支援担当、就労訓練事業所
支援までの経過	大学卒業後、1年間のアルバイトをしていたが会社都合で退職し、以降就労していない。家族の通院や家事の手伝いをしていた。施設入所の祖母への定期的な訪問をしていたことから、介護の仕事に興味をもっていた。両親からは「今度どうしていくつもりなのか」と責められ、別居の兄弟は心配していた。
支援開始後の展開	家族以外との接点が少なく、自宅にいる時間が長かったため、就労訓練から始めることを提案した。就労については、作業の遅さ、疲れやすさなどの課題があった。また、本人は苦手なことはやりたくないという意識があり、「リンク」の支援員も入ったの振り返りの面談を重ね、改善していった。 訓練中は無遅刻無欠席で、訓練終了後は直接雇用となった。その後、本人の意思で研修を受講し、就労時間をのばし、次のステップを目指している。

コメント

訓練開始時は本人ができていることの認識について、本人と訓練先とでは齟齬があった。面談では認識の違いを明確にし、主の就労への取り組みの意識が上がるように支援した。就労開始後も今後も就労先及び家族との情報共有により本人の課題に取り組むことを継続する。

2. 親の介護への責任感から、自分の自立生活が後回しになっていたケース

（事例の概要）高齢の両親の介護をしながら短時間就労をしていた。自分がやらなくてはいけないという思いと、就労時間を増やす不安が重なり、踏み出せない状況であった。ケアマネと相談をしながら、介護サービスを取り入れながら、本人が興味をもつ仕事で就労につながった。

父 70 代 認知症



母 70 代 デイサービス利用



40 代 長男



40 代 長女
他区在住。仕事で忙しく
週末のみ介護に関わる。



〈支援状況〉

関係機関	「リンク」、ぶらっとホーム就労支援担当、ケアマネ、あんしんすこやかセンター、保健福祉課地域支援、企業
支援までの経過	高齢の両親と同居。大学卒業後就職できず実家に戻る。週2～3日のアルバイトをしていたが、両親が高齢になり介護を担当することが増えてきた。本人は家事も行いながら母親のデイサービスの送り出しを行ってきた。父親の認知症が進み本人の負担も大きくなるが、親の面倒は自分が見なければいけないという思いがあり、短時間のアルバイトから抜け出せない状況であった。 介護とアルバイトに追われる生活で気持ちが不安定になってきたため、姉とケアマネが相談をして、自分の人生を考えられるよう、窓口につながり就労支援を受けるようになった。介護面ではケアマネと姉の協力を得て、負担軽減をはかった。
支援開始後の展開	就労面では、過去のアルバイトの話、現在のアルバイトの話を聞きながら面談を続けた。心理面や生活面の支援担当者とも連携をし、本人の体調面、心理面に配慮した。 興味を持った仕事では、職場見学に同行し、理想と現実の違いを本人に感じてもらう体験もできた。面談や見学を通して、本人の道徳的、規範的な価値観を大切にしている面がわかった。価値観が生かせる職種でかつ興味のある仕事で就労をするが、動作の遅さ、覚えることの多さでミスマッチであることがわかった。企業からの職場転換の提案があり、異動となった。新しい職場では、仕事にも慣れ、職場では上司や同僚ともコミュニケーションをとることができ定着している。

コメント

就労では、過去のアルバイト経験の話を聞くことで、本人の強みを見つけ自己肯定感を醸成することが大切だと感じた。また、本人の希望を尊重するようにした。現実とのギャップを自身が感じる大切であると思われ職場見学にも同行した。その結果、本人により適した職種への方向転換することができたと思われる。

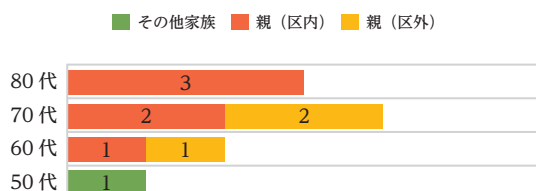
6. その他データ

①家族への「リンク」支援開始後、当事者につながったケース件数

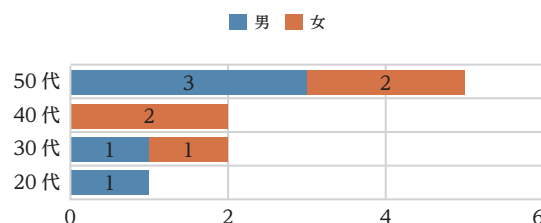
令和6年度は、10人の当事者が家族の相談からつながった。

把握した当事者件数	うち、当事者がつながった件数	割合
47	10	約21%

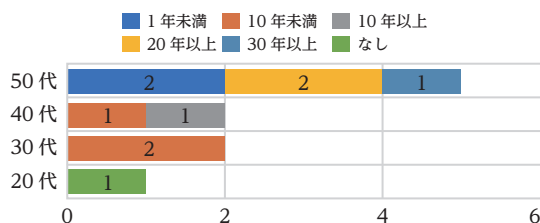
家族の年代と属性



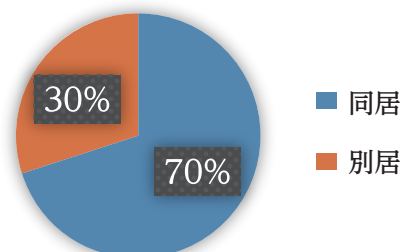
当事者の年代と性別



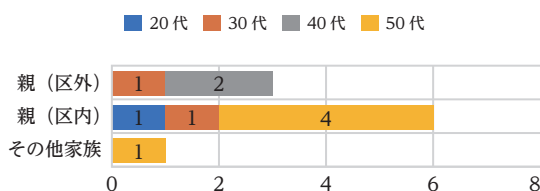
ひきこもり期間



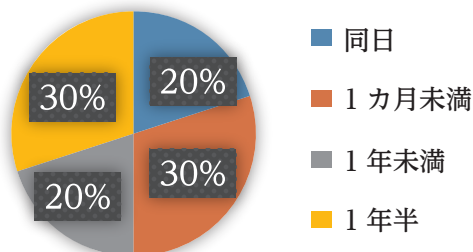
同居の有無



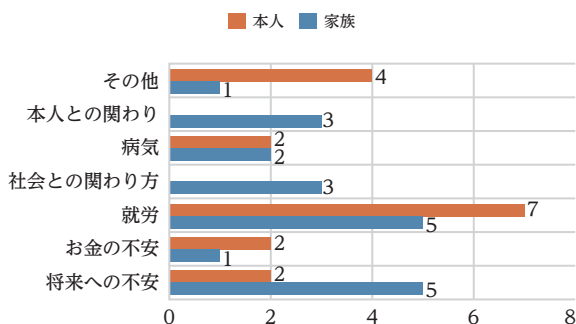
当事者年齢別家族属性



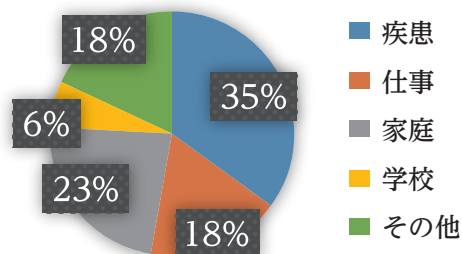
つながるまでの期間



家族当事者の主訴（複数回答）



ひきこもり要因

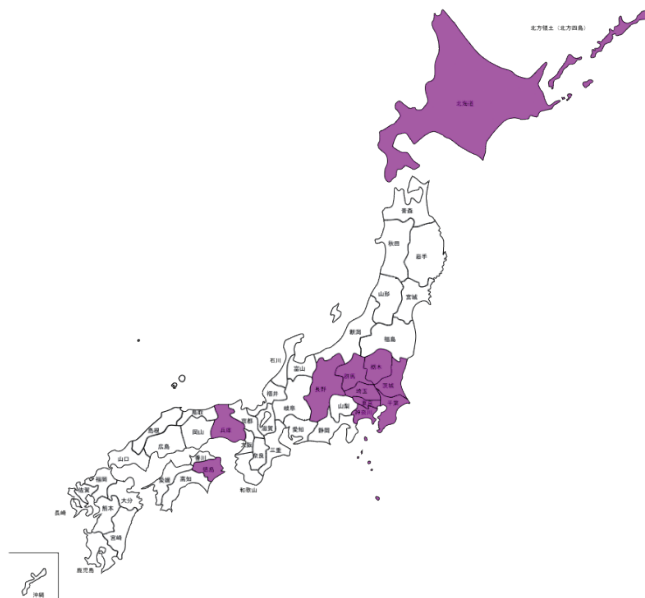


POINT

令和6年度相談受付のうち、家族から当事者につながったケースは10件21%であった。そのうち家族同居率は70%で、前年度のデータと同様に同居家族から、当事者支援につながりやすいということがわかる。令和6年度では、当事者の来所時の主訴は、就労についての相談が最も多く、その後、就労支援が開始し、就労決定された方もいる。当事者につながるために、家族の存在が重要なことも見えてくる。

②区外からつながったケース

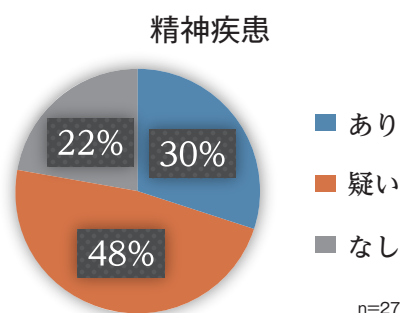
区外在住の家族や親戚などから、区内在住の当事者の相談が多くあった。また、区内在住の家族から区外の当事者についての相談もあった。家族が当事者に対して遠方から金銭的な援助を続けており、自分たちの生活を続けていくのが難しくなっていること、子どもに対して連絡を取ろうとしてもなかなか通じなかったり、全く連絡が取れないような内容が多かった。



当事者が区内で家族が区外…17件
当事者が区外で家族が区内…10件

東京都内（区外）…13件	長野県…1件
神奈川県…3件	兵庫県…1件
北海道…3件	徳島県…1件
千葉県…1件	
埼玉県…1件	
栃木県…1件	
群馬県…1件	
茨城県…1件	

	あり	疑い	なし
精神疾患	8	13	6

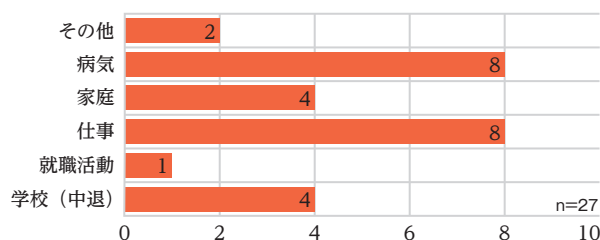


当事者に対しての関わり方や、近隣住民とのトラブル（騒音が気になるなど）など精神疾患の疑いがあるケースが目立った。家族から関わりを持とうとすると、連絡が取れない、話をして金銭的援助のことのみで、状況を知りたくてもわからないというケースが多かった。その中で、家族からの相談で当事者につながったケースもあった。



	学校（中退）	就職活動	仕事	家庭	病気	その他
ひきこもり要因	4	1	8	4	8	2

ひきこもり要因



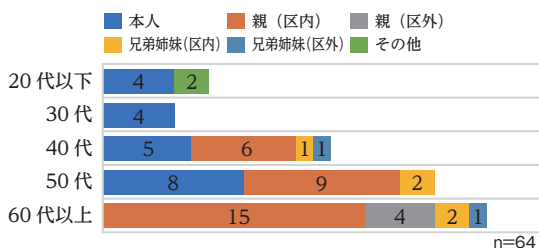
区内在住の当事者については、上京して就職してもうまくいかず、ひきこもったケースが多かった。不登校になったまま社会につながらず、仕事もできず家族と離れることを希望し自ら家を出たり、家庭環境が要因で家を出て1人で暮らしているケースもあった。

▶ 支援開始後の展開

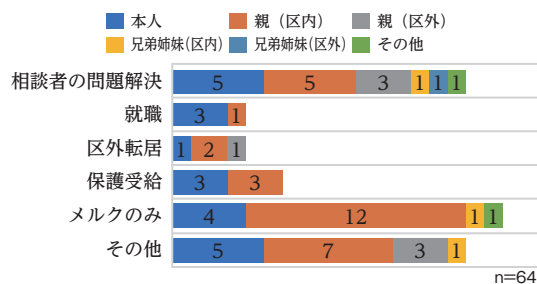
- ・ 遠方のため来所しての面談が難しかったので、電話・メール・オンライン面談を行った。
- ・ 家族が上京したタイミングで一緒に訪問し、当事者につながれた。その後生活保護の申請にも同行した。
- ・ アプローチの機会の一つとしてアパートの契約更新のタイミングがあった。経済的援助をしていくことが難しいこと、更新が難しいことを家族からどう伝えるかを一緒に考えた。更新せず地元に戻ったケースがある。

③ 終結ケース

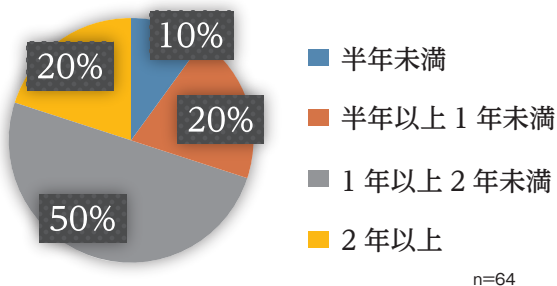
終結ケース件数



終結理由



支援期間



支援期間	(人)
半年未満	6
半年以上1年未満	13
1年以上2年未満	32
2年以上	13
合計	64

令和6年度終結ケースは64件。終結理由は、生活面の課題が解決して、精神面のフォローが残りメルクマールの支援に移行したケースが多く18件、次に相談者の課題解決が16件であった。その他となっているのは、残念ながら相談者の家族や当事者と連絡が取れなくなったケースで16件であった。

第2節 開催会議・多機関連携

1. 重層的支援協議会・部会

① 代表者会議

	日 時	内 容
第 1 回	令和6年8月5日（月） 14時～16時 オンライン開催	(1) 各部会報告 ・8050 支援部会 ・ひきこもり・就労支援部会 ・不登校・ひきこもり支援部会 ・思春期青年期精神保健部会 (2) 各支援機関の取り組みの紹介 ・メルクマールせたがやの取り組み ・せたがや若者サポートステーションの取り組み ・ひきこもり相談窓口「リンク」の取り組み (3) 世田谷区での取り組みの紹介 ・「重層的支援体制整備事業」 ・「世田谷区子ども条例の一部改正」 ・「生活保護世帯から進学する若者のための給付型奨学金」 ・「ヤングケアラー支援体制の強化」
第 2 回	令和7年1月14日（火） 14時～16時 オンライン開催	(1) 基調講演 講師：世田谷区ヤングケアラーコーディネーター 星野 桃代氏、氏原 拳汰氏 テーマ：「狭間にいるヤングケアラーとその家族への支援について」 (2) 質疑応答・意見交換 (3) 顧問 宮本みち子先生からの講評 (4) 情報提供、ほか

構成員

<行政機関等>

- 総合支所保健福祉センター……生活支援課／保健福祉課／健康づくり課／子ども家庭支援課
- 生活文化政策部……人権・男女共同参画課
- 経済産業部……工業・ものづくり・雇用促進課
- 保健福祉政策部……生活福祉課
- 高齢福祉部……高齢福祉課／介護保険課／介護予防課・地域支援課
- 障害福祉部……障害地域生活課／障害保健福祉課
- 子ども・若者部……子ども・若者支援課／児童課／子ども家庭課／児童相談支援課
- 世田谷区児童相談所
- 世田谷保健所……健康推進課
- 教育政策・生涯学習部……学校健康推進課
- 学校教育部……教育指導課
- 教育総合センター……教育相談課
- 東京わかものハローワーク

構成員

<その他>

- ぷらっとホーム世田谷
- メルクマールせたがや
- せたがや若者サポートステーション
- 青少年交流センター
- 民生委員児童委員協議会
- 区立小学校・中学校校長会
- 区内都立高校
- 区内大学
- 医療機関
- 区内医師会
- 研究機関
- 障害者就労支援センター
- 発達障害相談・療育センター
- 発達障害者就労支援センター
- 産業振興公社
- 特定非営利活動法人
- 認定 NPO 法人

<顧問>

- 放送大学／千葉大学名誉教授

社会福祉法第 106 条の 6 に基づき、行政、支援機関等が集まり重層的支援体制整備事業を円滑に実施するために必要な情報交換及び必要な支援を検討する重層的支援協議会が開催された。世田谷区では、子ども・若者育成支援推進法第 19 条 1 項に基づく、子ども・若者支援協議会が既に設置されており、構成メンバー・目的が重なることから、代表者会議は両協議会を同時に開催している。官民合わせ、様々な分野からの参加があり、「リンク」の事業周知を効果的に行うことができた。令和 4 年より、2 回ともオンライン開催となった。



② 8050 支援部会

第1回は、社会的孤立・セルフネグレクトについて講演会を行い、ゴミ屋敷問題の背景や支援について理解を深めた。第2回は第1回目の講演会を受けて、グループワークを行い、世田谷区内で各機関ができることを話し合った。

	日 時	内 容
第1回	令和6年10月4日 9時30分～11時30分 三茶しゃれなあどホール スワン・ビーナス	講演会 「社会的孤立・セルフネグレクト ～ゴミ屋敷問題を考える～」 岸恵美子氏（東邦大学大学院 看護学研究科・教授）
第2回	令和7年2月20日 14時～16時 三茶しゃれなあどホール スワン・ビーナス	講演会の内容を受け、全体で意見交換

構成員

<地方公共団体の機関>

- 総合支所保健福祉センター…生活支援課／保健福祉課／健康づくり課
- 保健福祉政策部……………生活福祉課
- 高齢福祉部……………高齢福祉課／介護保険課／介護予防・地域支援課
- 障害福祉部……………障害保健福祉課

<関係機関・学識経験者>

- ぷらっとホーム世田谷
- 成年後見センター
- メルクマールせたがや
- あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）
- 東京都立松沢病院
- 世田谷区基幹相談支援センター
- 世田谷区社会福祉協議会
- 地域障害者相談支援センター「ぽーと」

■ 構成員からの意見

- ・「目の前のゴミに意識がいき、片付ける為にどうしていいか考えがちであったが、アセスメントが重要であると改めて理解できました。個々に背景が異なるため、丁寧に向き合おうと思います。
- ・ゴミ屋敷やセルフネグレクトは解決が難しいですが、一緒に考える場や対応策があることは心強いと思いました。

③ ひきこもり・就労支援部会

ひきこもり・就労支援部会は、「就労」をキーワードとした支援ネットワークの構築を主な目的としている。第2回は、求人開拓の講演会を行い、構成員以外の関係機関以外にも参加を呼びかけ、第3回目では各機関の役割・機能を共有し理解が深まった。

	日 時	内 容
第1回	令和6年6月21日(金) 14時～16時 三茶しゃれなあとホール スワン・ビーナス	部会の位置づけおよび役割についての説明 各機関の自己紹介(ひきこもり・就労支援に関連する事業内容等) 総合計画の共有と取り組みの方向性について
第2回	令和6年10月24日(木) 14時～16時 オンライン開催	講演会 「求人開拓を含めた就労支援について」 野々村光子氏(社会福祉法人わたむぎの里福祉会理事)
第3回	令和7年2月7日(金) 14時～16時 三茶しゃれなあとホール スワン・ビーナス	講演会の振り返りと求人開拓について グループワーク・発表

構成員

＜地方公共団体の機関＞

- 経済産業部……………工業・ものづくり・雇用促進課
- 保健福祉政策部……………生活福祉課
- 障害福祉部……………障害地域生活課・障害保健福祉課
- 子ども・若者部……………子ども・若者支援課／児童相談支援課

＜関係機関・学識経験者＞

- ぷらっとホーム世田谷
- メルクマールせたがや
- せたがや若者サポートステーション
- 青少年交流センター……………野毛／希望丘／池之上
- 障害者就労支援センター……………「すきっぷ」就労相談室／「しごとねっと」
- 発達障害者就労支援センター……………「ゆに（UNI）」
- 特定非営利活動法人東京都自閉症協会「みつけばハウス」
- 特定非営利活動法人まひろ「アイキャリア」
- 三軒茶屋就労支援センター「三茶おしごとカフェ」
- 世田谷区男女共同参画センター「らぷらす」
- 認定特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル「せたエール」
- ハローワーク
- ＜オブザーバー＞
- 世田谷保健所……………健康推進課

■構成員からの意見

- ・野々村講師のお話が上手で、事業内容についてユーモアを交えながらの説明だったのでとてもわかりやすかったです。障害者就労支援事業は障害者をいかに自身の特性と合った企業にマッチングするのかが重要だと思いますが、講演で紹介された方々は皆生き生きと働いている様子を見て、事業所の熱意や企業への働きかけ、利用者と信頼関係が大事であることを感じました。マッチングすれば終わりではなく、その後もフォローをしていくことで、安心して就労できることから、こういった事業者が全国にもっとたくさん増えるとういと思いました。
- ・軽快な語り口調で、実際に苦労されたことや、取り組まれてきたことを丁寧に説明いただき、大変勉強になりました。ステップアップを求めないという言葉が刺さりました。
- ・それぞれの現場での視点で、アセスメントなどの課題を共有できたことが有意義でした。誰でもアクセスしやすい求人サイトがあると良いと意見が出たので、関連機関の皆さんとこれから一緒に考えていければと思いました。

2. 重層的支援会議（リンク検討会を含む）

「リンク」では、リンク検討会と重層的支援会議の2つの重層的支援会議を開催している。

▶ リンク検討会

「リンク」では毎週木曜日にメンバー全員（ぶらっとホームおよびメルクマール）と区の生活福祉課担当者が前週の新規受入をすべて検討し、今後の支援方針を立てている。また、アウトリーチや多機関との協働、緊急性のある案件を随時共有し、2機関での動きの確認を行っている。

▶ 重層的支援会議

年4回開催。支援プランの作成や終結について決定や確認を行っている。
また、随時過去案件についてのモニタリングと、相談者からの連絡が途絶えている案件について共有している。

（単位：回）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
重層的支援会議 （リンク検討会及び 重層的支援会議）	4	6	4	4	6	5	5	5	4	4	5	4	56

（単位：件）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
プラン作成件数	3	5	1	3	2	2	1	2	2	2	2	6	31
うち 新規作成件数	1	2	0	2	2	2	0	2	2	0	1	6	20
再プラン件数	2	3	1	1	0	0	1	0	0	2	1	0	11
終結件数	12	7	7	6	0	1	0	14	3	0	13	1	64

※令和6年度のための終結件数



3. 支援会議

「リンク」では複合的な課題を持つケースに対し、社会福祉法第106条に定められている支援会議を行っている。支援会議では情報の共有だけでなく、今後起こることに対しても話し合いを行い、各機関の強みをどう活かして世帯をサポートしていくか、世帯ごとの連携体制づくりを大事にしている。そのため、現在関わっている機関だけでなく、今後関わりを持つ可能性のある機関にも参加を呼びかけている。

令和6年度より、新たに保健福祉4課が多機関協働事業者となり、支援会議を開催するようになったため、支援会議開催内容にも広がりが出てきた。「リンク」も開催だけでなく、メンバーとして参加をするようになった。

また、「つなぐ」だけではなく、「重なりあう連携の形」を大事にしており、それぞれの機関の役割を持ちつつも、その家族の課題解決のため、より良い形を考えていく会議とすることに重点を置いている。そのため、出席する機関には役割にとらわれることのない、自由な発想や意見を述べてもらう会議となっている。

会議開催件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
支援会議	0	1	2	1	0	1	0	0	0	0	0	2	7

※ほかにリンクがメンバーとして参加した支援会議は6件

検討された対象当事者の年齢（一世帯複数カウントあり）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
当事者	2	0	1	3	3	1	10

<主な参加機関一覧>

- 生活支援課
- 区内小学校
- 保健福祉課
- 教育総合センター
- 健康づくり課
- 児童相談所
- 子ども家庭支援課
- 地域社協事務所
- 生活福祉課
- 民生委員・児童委員
- 地域障害者相談支援センター「ぽーと」
- 訪問看護ステーション
- あんしんすこやかセンター
- 高齢者施設
- 成年後見センター
- 児童館
- など

POINT

会議を開催した当事者の年齢をみると幅広い年代を対象としている。世帯としてみた時に、子どもの不登校問題や高齢の親の介護についてなど、一つの世帯に複合的な課題が多数あり、関連機関がつながりを持つことで、支援の幅が広がると感じた。現在、世帯と関わりがある機関だけでなく、今後の課題を見据えて参加した機関も多く、中には当該ケースの2回目の会議の時には、関わりを持つようになって参加した機関もあった。

4. 連携機関一覧

区役所

- 保健福祉センター 生活支援課／保健福祉課／健康づくり課
子ども家庭支援課
- 生活福祉課
- 障害者地域生活課
- 児童相談所
- 児童館
- 教育総合センター（教育相談課）
- 子ども・若者支援課
- 人権・男女共同参画課
- まちづくりセンター
- 工業・ものづくり・雇用促進課

関連機関

- あんしんすこやかセンター
- 成年後見センター
- 若者サポートステーション
- 教育機関（学校）
- 介護事業所
- 地域障害者相談支援センター
- 障害者就労支援センター
- 地域社協事務所

地域

- 地域社会福祉協議会事務所
- 子育て支援団体
- 医療機関
- 民生委員・児童委員
- 不動産業者
- 警察



第三章 事業評価

第1節 事例報告

1. 両親の死後取り残されたケース
2. 障害福祉部門と連携をしたケース
3. 家族からつながって就労に至ったケース
4. 制度につながることで課題を整理したケース

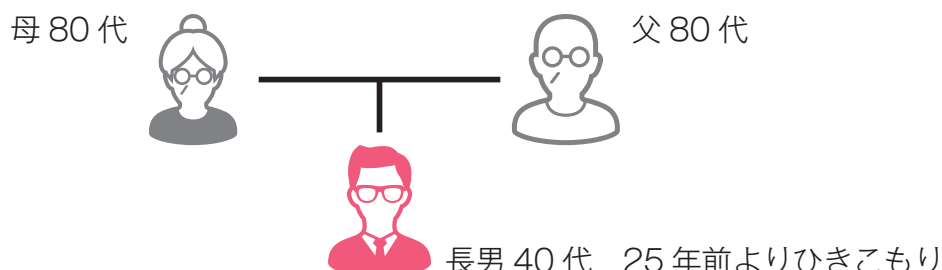
第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

1. 連携機関からの意見
2. 利用者の声

第1節 事例報告

1. 両親の死後取り残されたケース

実家で20年間以上ひきこもり状態であった本人（男性50代）。両親が亡くなり、困窮して生活保護となった後、リンクにつながった。複数の支援機関と連携し、本人への支援が進むにつれて本人に変化が見られるようになった。



〈支援状況〉

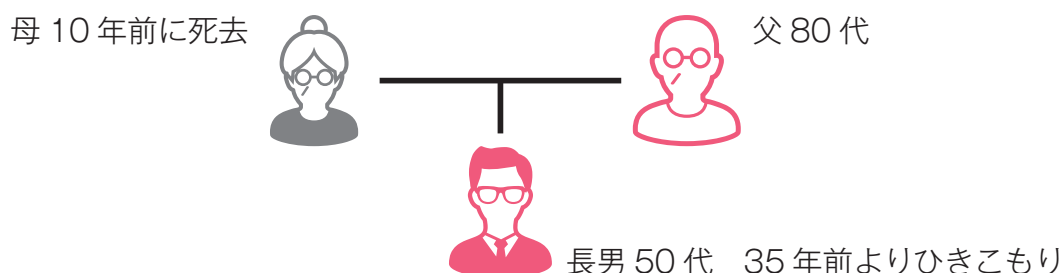
関係機関	生活支援課、保健センター、医療機関、リンク
リンク介入前の経過	専門学校中退後、20代の頃は人と関わることの少ない仕事に就いたが長く続かず複数の仕事を転々とした。その後、実家でひきこもり状態となり、50代となった。数年前に父の死亡後、徐々にリビングに物が増え始め、その後母も2年前に死亡。手持ち金がなくなり困窮していくが、自分から誰かに相談することはできず、本人の将来を心配した親戚が本人と一緒にリンクに来所。
支援開始後の展開	うつむき気味で無表情。お風呂に入っていない様子で、質問に対して、言葉がなかなか出てこず、かろうじて首を縦横に振るジェスチャーで最低限の意思表示をしていた。生活保護申請の提案に応じ受給開始。同時にリンクでは、体調不良の本人に同行し内科受診につないだ。 また、本人との定期的な面談を実施し、何等かの障害の可能性も考慮しつつ、当初は生活上の困りごとを聞き出すことに焦点を絞った。本人の了解を得て自宅を訪問し、亡くなった家族が残した生活品等でごみ屋敷状態となっていた室内の改善に向けたサポートを生活支援課と連携して進めていった。不用品が処分された後もぷらっとの日常生活支援アドバイザーが6か月間入り、共に片付けを行う中で本人も工夫して片付けをするようになった。 環境が改善されていくにつれ、少しずつではあるが本人と支援者たちとの会話も続くようになり、20代の頃は就労していたこと、バイクでの遠出が好きだったこと、家族との関係など今までの経緯を聞くことが出来た。本人が抱える生きづらさについて一緒に考え、「自分に出来ることがあれば何かしたい」との本人の言葉を聞き出した。その上で心理検査を受けることを提案したところ、本人の了解を得た。保健センターでの検査を経て精神科受診に同行。通院を継続してデイケアに通い始め、現在は就労継続Bへの通所を目指している。

コメント

親亡き後、孤立孤独であった本人が、生活環境改善をきっかけに変化していったケース。本人の支援に関わる人が増え、本人を取り巻く環境も変わり、信頼関係が構築されてようやく希望を聞くことが出来た。時間をかけて本人の意思に基づく本来の支援が行えるようになったケースである。

2. 障害福祉部門と連携をしたケース

父の認知症が進み、父に介護保険サービスが入ったが、同居する無職の長男が手続きや判断ができず、サービスの支払いが滞るようになった。長男は小学校から不登校気味で中学は通っておらず、ほぼ自宅で父母と過ごしていたことがわかった。



〈支援状況〉

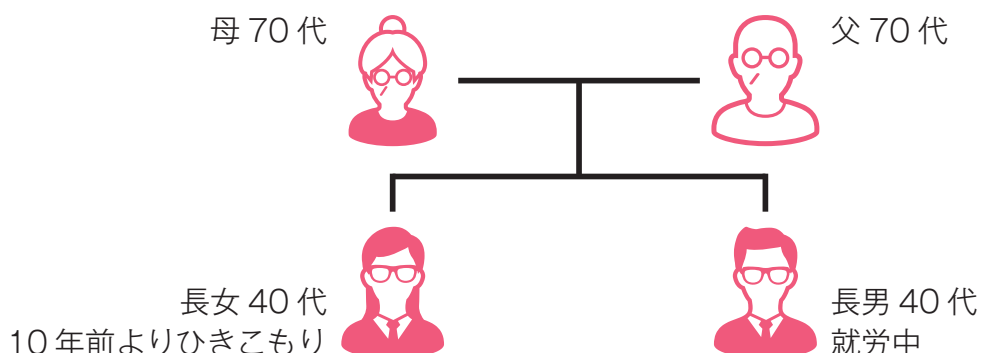
関係機関	保健福祉課、生活支援課、あんしんすこやかセンター、居宅介護支援事業者、デイサービス、後見センター、ぽーと、保健センター、訪問看護
支援までの経過	長男は小学校から不登校気味。支援学級に入ったこともある。父の介護保険サービスの支払いが滞り、ケアマネがあんしんすこやかセンターに相談。ケアマネやデイサービス担当者が長男のフォローを行うが、状況は改善されず、長男の支援先としてリンクにつなげた。
支援開始後の展開	リンク面談で長男が金銭管理や書類手続きを行うことは難しいと判断。借金も増えており、長男自身もどう対応したら良いのか困っていた。そこで、長男の同意のもと、父に後見人をつける支援を行う。同時に、一人での生活のフォローのため、日常生活支援アドバイザーが入り、荷物の山となっている部屋の片付けや掃除の仕方など一人暮らしのサポートを行った。また、通帳や携帯電話も持っていなかったため、マイナンバーカードの作成、通帳作成や携帯電話取得の支援も行った。その過程で障害が疑われたため、ぽーとのスタッフが保健センターに相談し、愛の手帳取得を支援。父は施設入所をし、一人暮らしのサポートは訪問診療、看護、ヘルパーが担うことになった。 一人暮らしとなってからは生活保護を受給し、障害の支援を受けながら生活をしている。

コメント

子どもの頃に不登校のまま自宅で両親と過ごし、両親が高齢になって子の面倒を見られなくなっ
てから障害が発見されるケースは多い。主に両親の介護サービス導入時に事業者が本人への対応
に困って相談につながっている。本人が拒否をしているわけではないが、療育や医療につながつ
ておらず、一人で生活することに困難が生じている。
親子ともに制度につながり、それぞれの関係機関が対応を行うことで、心身ともに安心安全な生
活が行えるようになったケースである。

3. 家族からつながって就労に至ったケース

高校卒業後就労したが、うつ病を発症し就労が継続できず、ひきこもる生活を送っていた。母親が本人を心配し来所され、親面談が開始した。親面談を通じて、娘が相談に来所することができ、就労支援を経て就労が決まった。



〈支援状況〉

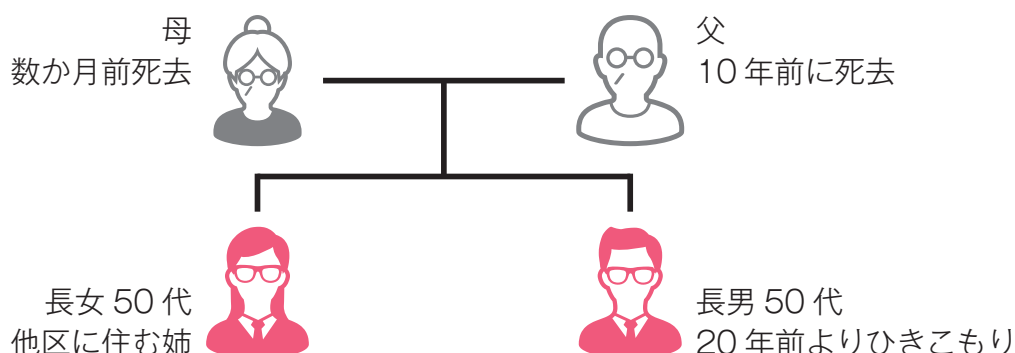
関係機関	ぷらっとホーム（就労支援）、地域社協事務所地区担当
支援までの経過	高校卒業後、単身上京し中小企業に就職するが、人間関係や仕事量の問題がきっかけで、うつ病を発症した。その後、退職と再就職を繰り返し、ひきこもるようになった。母が「リンク」の相談につながったことから、本人も来所できるようになり、就労支援が開始した。
支援開始後の展開	「リンク」で親面談を行い、長女の様子や親子関係について確認していった。その中で、長女の状態が安定した時期に「一人では解決しきれない」と話していたということもあり、母から「リンク」への来所の声掛けをしてもらうことを提案したことで、本人の来所につながった。 本人支援の中で、就労への焦りがある一方で、体力がもつのかという不安もあったため、まずは地域活動などから体調を慣らしていくこととなった。地域社協事務所で、子ども食堂のボランティアの紹介があり、3か月ほど参加し、体力に自信がついたタイミングで、「リンク」の就労支援担当者と連携して、就労に向けて支援をしていった。その過程で、以前の就労経験を踏まえて、体調と働き方を考えた時に、障害者雇用で環境調整をすることが最善であるという方向になった。希望に沿った求人があり、就労が決定した。就労が継続できるよう、引き続き伴走していく。

コメント

親支援から子どもにつながる事ができたケースである。親から本人の状況や家族の関わり方の情報収集を行いながら、どのような声掛けやタイミングが良いのかを一緒に考えていくことが大切である。

4. 制度につながることで課題を整理したケース

高校卒業後実家を出て働いていたが、30代で失職し経済的に立ち行かなくなり実家に戻る。以降20年近く自宅中心の生活が続く。10年前に父親、今年母親を相次いで亡くし一人暮らし。



〈支援状況〉

関係機関	医療、ヘルパー事業所、JKK 東京、地域社協事務所、居宅介護支援事業者
支援までの経過	父の死去後、母と二人、都営住宅で生活。母が入院したため、時々連絡を取り合っていた他区に住む姉が、生活が立ち行かなくなる状況を見かね、本人と一緒にリンクに来所。その後、母が死去し、単身世帯となった。
支援開始後の展開	幼少期からの困りごとを丁寧に聞くことにより、学齢期からの苦労があったことがわかる。そのため、来所すぐに本人の同意を得て精神科の通院同行を行い、検査。境界知能との判定で、愛の手帳取得には至らないが、精神障害者手帳の取得の可能性がでてきた。6か月後に障害者手帳の申請を行い取得。すぐに JKK 東京に障害者手帳を取得した連絡を行う。その後、母親が死去したため、都営住宅の使用承継申請を行い、住まいを確保。料理、掃除、洗濯などの家事全般を行ったことがなく、ヘルパーと一緒に家事をすることで少しずつスキルアップをはかった。また、自分の通帳と携帯電話を初めて取得し、両親の遺産を今後どのように管理していくか、姉とともに家計相談を継続。 家に人の出入りが増え、少しずつ面談でも気持ちを話すようになってきて、「孤独死が怖いので、人とつながることが大事だと思っている」などの発言も聞かれるようになった。 携帯電話の使い方を学ぶために地域のスマホ教室を地域社協事務所で案内してもらい、通うことを検討。機械を触ることは好き、ということで熱心に検索機能などを覚えて活用している。

コメント

両親の死亡後、取り残されて住まいを失うケースもある。事前に障害福祉制度につながることで、継承権を取得して、住まいを変えることなく生活ができるようになったケース。人との関わりで今後の生活についても考えることができるようになり、福祉制度の利用に前向きになることで生活の幅が広がっている。

第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

1. 連携機関からの意見

- 複合的な課題があるご家庭は高齢者の対応だけではどうにもならない。どこにつなげばよいのか、とっていた。リンクができてパンフレットを渡して案内できる場所があるというのは助かる。すぐに相談につながらなくても、つながれる場所があるというのはご家族にとっても安心感になると思う。(高齢部門)
- あらゆる相談、支援の体制が整っていることは心強い。(保健関係)
- リンクができたことにより、ひきこもりの方本人だけでなく、その家族の支援が同時にできるようになったことが最大のメリットだと思います。複雑化・複合化した課題のある世帯については、リンクが関係機関を集めて支援会議を行うことにより、良い方向に向かった世帯は多いと思います。(生活支援課)
- 生きづらさを抱え孤立していたが障害には該当しない方をリンクにつなぎ、ご本人への支援についてカンファレンスを複数回おこなった。リンクではご本人の希望で就労支援が入り、次のステップに進んでいった。(保健部門)
- 生きづらさを抱え孤立していたが障害福祉制度には該当しない方をリンクにつなぎ、ご本人への支援についてカンファレンスを複数回おこなった。リンクではご本人の希望で就労支援が入り、次のステップに進んでいった。(障害部門)
- さまざまな世帯状況があり（ひきこもり状態のこどもが同居しており）高齢者支援が進まないケースに対して、ひきこもり相談窓口にご相談できることは心強い。(高齢部門)
- 基本、高齢の担当は介護保険制度の支援を行うので、別の視点で見立てをいただき一緒に動けて良かった。(高齢部門)
- ひきこもりの背景には、生きづらさや何かしらの理由で外に出られないなど、一人ひとり異なる事情があり、制度にアクセスできずに長い時間を過ごしてきた人もいます。「どこに話していいのかわからなかった」「誰にも相談できなかった」というご本人やご家族からの切実な声があり、支援の在り方を考えさせられています。

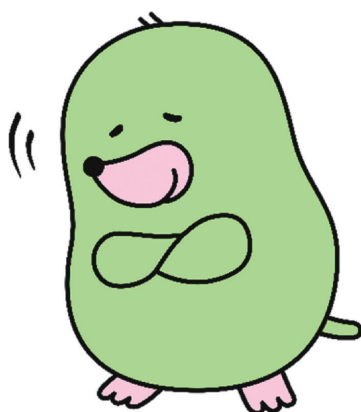
リンクが「話してみよう」と思える場として地域にあることは大きな意義があり、今後も連携を大切にしながら、ご本人のペースを尊重した支援を続けていきます。(障害部門)
- 生活、お金、障害のことなど、たくさんやる必要がありますが、お互いの強みを生かしながら協力してご本人にかかわることができるのは心強いです。(障害部門)

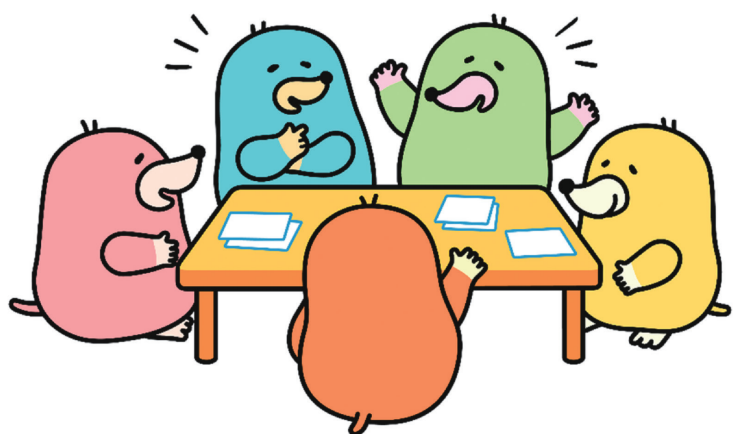
2. 利用者の声

- リンクを利用することで、外出する機会をもつことができました。少しずつですが、外とのつながりを感じられるようになりました。
- 保健師さんや精神科医の先生など、専門家のお話を直接聞くことができたことが、自分にとってとても貴重な体験でした。
- 就職相談会の情報をチラシで知ることができ、これまで知らなかった支援につながる機会が広がりました。
- 誰かに話を聴いてもらえるだけで、気持ちが軽くなったり、自分の考えを整理できたりすることがあるのだと実感しました。
- 本人が相談担当の方と定期的に会って話す中で、安心して話せる関係が築けているようです。先日、家族としてその担当者の方とお会いする機会があり、本人の様子を伝えていただけたことがありがたかったです。
- 家族の問題について、第三者の立場から理解していただけたことは、私たちにとって本当に心強く、感謝の気持ちでいっぱいです。
- 相談担当者の方とのやりとりは丁寧で、安心感があります。一方で、連携している二つの機関（メルクマールせたがや・ぷらっとホーム世田谷）で連絡手段に違いがある点には、少し不便を感じることもありました。

例えば、電話のみでのやりとりになってしまう場面では、メールが使えるともう少し気軽に連絡や相談ができるのではと感じました。

他の支援機関と同じように、気軽にやりとりできる仕組みがあると、より利用しやすくなると思います。





第四章 広報・啓発

第1節 研修開催と「リンク」紹介

1. 外部講師研修会
「社長が応援団長になる地域づくり」
社会福祉法人わたむきの里福祉会 理事 野々村光子氏
「社会的孤立・セルフネグレクト…～ゴミ屋敷問題を考える～」
東邦大学大学院 看護学研究科 教授 岸恵美子氏
「支援会議のすすめ方」
大正大学 名誉教授 精神科専門医 近藤直司氏
2. 「リンク」についての普及啓発

第2節 家族会・当事者会との連携

1. 家族会
2. 当事者会
3. 「オープンダイアログ体験会」(当事者会、家族会との連携)
4. 「第4回かたら～な」(当事者会、家族会との連携)

第1節 研修開催と「リンク」紹介

1. 外部講師研修会

①「社長が応援団長になる地域づくり」

社会福祉法人わたむきの里福祉会 理事 野々村光子氏

第2回ひきこもり・就労支援部会において、就労支援と開拓についての講演会をオンラインで開催。

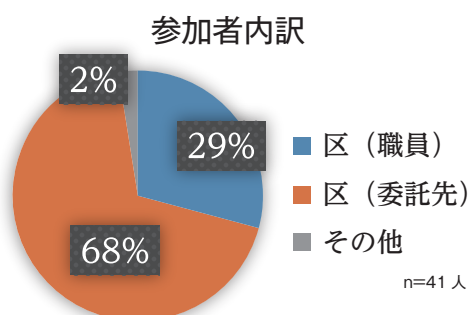
滋賀県東近江市の地域作りと地域福祉の取り組みの中で、障害がある方や自宅で充電中の人の働くを応援ということで、少しの応援が必要な人から教えてもらったこと、地域の企業などとの取り組みについて語られた。

企業との付き合い方、就労困難な人への向き合い方を学び、人をまん中においたマッチングの手法や考え方、今だけでなく将来に向けた仕事を含む地域づくりに関して、考えるヒントを得ることができた。

区内の支援機関に加え、区外の就労支援機関の参加もあり、講演後は出席者から具体的な質問が活発になされ、大変好評だった。

◇当日参加機関…23 機関 41 名

属性	人数
区（職員）	12
区（委託先）	28
その他	1



参加者アンケート結果

- 野々村講師のお話が上手で、事業内容についてユーモアを交えながらの説明だったのでとてもわかりやすかったです。障害者就労支援事業は障害者をいかに自身の特性と合った企業にマッチングするのが重要だと思いますが、講演で紹介された方々は皆生き生きと働いている様子を見て、事業所の熱意や企業への働きかけ、利用者と信頼関係が大事であることを感じました。マッチングをすれば終わりではなく、その後もフォローをしていくことで、安心して就労できることから、こういった事業者が全国にもっとたくさん増えると良いと思いました。
- オープンな土地柄と、中小企業が多い土地柄だからこそ、事業所と企業の距離の近さを感じました。野々村さんだから出来た、制度を越えてきた部分については、参考にするのはなかなか難しいと感じました。野々村さんのひきこもりの方や働くことについての捉え方や理念は大変素晴らしく、参考にさせていただきます。

- 職場体験を行える環境を確保するための努力がすごいです。働きたいと思う側も、職場体験を受け入れる側も一度顔を合わせる関係をつくることで、マッチングの齟齬が小さくお互いのやってよかったにつながるのだと感じました。



人の思いが
重なって
大きな大きな力になる。

『社長が応援団長になる地域づくり』

～10年後の彼と地域を見つめた就労支援～

「働く」ということ
私たちは毎日たくさん
「働きたい」と出会う。
その「働きたい」思いには
色んな意味がぎっしり。
家族への愛や自分のヘタクソや
自慢したい気持ち。
稼いだお金で居酒屋へ・・・
彼らの「働きたい」と出会う度、
「働くこと」が持つ力の
大きさに驚き、学ぶ。
また「働くこと」は
単なる作業ではなく、
生きる力を育むステージ・・・
そんなステージに立つ姿は
誰もが真剣、誰もがカッコイイ、
誰もがほんまもん。
輝く場所がここにある。

Tekito-

②「社会的孤立・セルフネグレクト…～ゴミ屋敷問題を考える～」

東邦大学大学院 看護学研究科・教授 岸恵美子氏

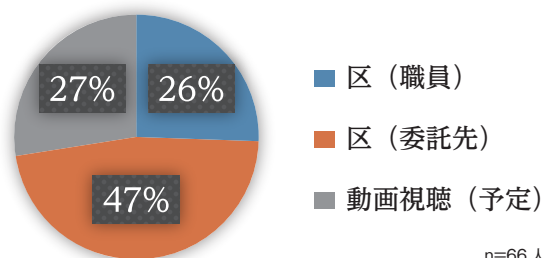
ひきこもりの現場ではセルフネグレクト状態に陥った方の生活課題が問題になることが多い。特に高齢の両親との同居、両親の死後にその問題に直面することもある。そのため、今年の8050支援部会では拡大版として、岸先生を講師にこの問題を学ぶ機会を設けた。

幅広く関心を持った方に講義を聞いてもらうため、後日の動画配信も行った。

◇事前申込 49名 欠席1名 動画視聴 18名予定

属性	人数
区（職員）	17
区（委託先）	31
動画視聴（予定）	18

参加者内訳



重層的支援協議会

拡大版 8050支援部会

ケアマネ、保健師など8050支援に関わる方、その他関係のある方

社会的孤立・セルフネグレクト…
～ゴミ屋敷問題を考える～

10月4日(金) 9:30～11:30

会場：三茶しゃれなあとホール（スワン・ビーナス）
三茶昭和ビル6階（三軒茶屋1-41-10）

孤立し支援を求めない人に対して、何ができるか？

問われる支援者の姿勢 求められる多職種協働の形とは？ 予防的観点から関りの可能性を考える

岸恵美子先生 東邦大学大学院 看護学研究科・教授

京都生まれ。日本赤十字看護大学大学院博士後期課程修了（看護学博士）。病院の看護師を目指し看護を学ぶうち、自ら受診や相談をしない人々に家庭訪問という方法で支援する保健師に魅力を感じ、東京都板橋区、北区で16年間保健師として勤務した。その後、保健師教育に関わりたくて大学教員となった後も、地域で支援を求めない人、いわゆるこみ屋敷で生活する人など、セルフ・ネグレクトの人への支援について継続的に研究を続け、現在は現場で活用できるアセスメントや支援ツールの開発に取り組んでいる。

お申し込みはこちらから！下記電話でも申し込み可能。
後日アーカイブ配信も行います。（会場参加か配信かを選択）
会場参加は人数制限があります。（先着50名）申し込み締切10/3

主催 ぶらっとホーム世田谷 世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」
03-5431-5354

（参加）医療機関、基幹相談支援センター、生活支援課、障害者相談支援センター、あんしんすこやかセンター、介護保険課、保健福祉課（地域支援、障害支援）、社会福祉協議会、環境保全課

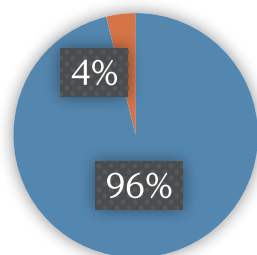
■参加者（合計 33 名）

生活福祉課	2
保健福祉課政策課	1
生活支援課保護・自立促進担当	14
保健福祉課（高齢・障害担当）	6
ぷらっとホーム世田谷（「リンク」含む）	8
メルクマールせたがや（「リンク」含む）	2

■講演内容について

良い	まあまあ良い	あまり良くない	良くない
26	1	0	0

講演内容について



■ 良い ■ まあまあ良い
■ あまり良くない ■ 良くない
n=27

感想

- 支援対象者と支援課題を挙げ明示することで、次なる支援体制と役割分担の検討・構築に至るプロセスが具体的になり、大変効率が良いと思った。
- 必要なポイントを学ぶことができた。
- プランニング案を会議の中で「作業する」という行為をすることで会議の結果にむけて気持ちを一つにできると感じた。とにかく事前準備の大切さが理解できた。
- 支援課題をきちんと示すことが重要なのでアセスメントをしっかりとしようと思う。
- 理想的な会議として事前の準備、課題の抽出、支援方針の検討、時間の管理という要素を教えてもらった。課題の抽出を誤ると支援方針が違う方向になってしまうことが少し不安ではある。
- 支援会議の進め方について悩んでいたが、今日の講義を聞いて改良する余地があるため、実践に移そうと思う。
- どんな支援を誰がどのようにするかという役割分担にフォーカスが当たっているので、具体的に会議がしやすいと思った。また、言語化して視覚的に落とし込んでいくことで明確になるので他機関もやりやすいと思う。
- 会の後に達成感、前向きな気持ちになることができる。

2. 「リンク」についての普及啓発

1) 区内他機関への説明

あんしんすこやかセンターのスキルアップ会議では毎年説明を行う機会を得ることができ、「リンク」の周知に役立っている。また、福祉人材育成・研修センターの協力により、ひきこもりの問題を広く区内支援者向けに届けることができた。

分類	回数	内容
区内他機関への説明会	5	●あんすこスキルアップ会議 ●砧支所生保 CW 向け説明会 ●世田谷区福祉人材育成研修センター専門性向上研修「ひきこもり（8050 問題）の理解・支援力向上研修～ひきこもりの理解と支援について～」 ●北沢地域合同地区包括ケア会議 ●発達支援コーディネーター向け説明会

2) 視察対応

今年度は 2 件の視察が行われた。

分類	回数	内容
視察	2	港区、岡崎市市議会

3) 講演会、研修会等

医療相談や他機関との連携事業により「リンク」の実践を学会で発表する機会に恵まれた。また、8050 支援部会の講演に協力いただいた岸先生のお声掛けで自治体講演会での発表の機会をいただくことができた。

分類	回数	内容
発表	4	●日本精神保健・予防学会 ●精神障害者リハビリテーション学会（リンク発表、多機関アウトリーチ発表） ●自治体講演会・情報交換「不衛生な住環境で生活する人への支援と課題 Part. 2」
セミナー、研修会等	3	「オープンダイアログ体験会」 第 4 回「かたら～な in 世田谷」 重層的支援体制整備事業研修「断らず、つながり続ける支援を考える」

4) ヒアリングおよび事前打ち合わせ

厚生労働省作成の「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～」作成に昨年度より引き続き協力し、今年度はヒアリングを 2 回受けた。また、よりよいホットラインの事例集への協力のためヒアリングを受けた。

分類	回数	内容
ヒアリング	4	厚生労働省「ひきこもり支援ハンドブック」作成ヒアリングよりよいホットライン、ヤングケアラー事業に関するヒアリング

アンケート結果

1. 申込 / 参加

事前申込 105 名 参加 70 名

属性	
ひきこもり当事者	14 名
当事者の家族	18 名
支援者、その他	38 名

2. 年代

10 代	0 名
20 代	3 名
30 代	2 名
40 代	9 名
50 代	15 名
60 代以上	14 名
無回答	27 名

3. 性別

男性	16 名
女性	54 名

4. 居住地域

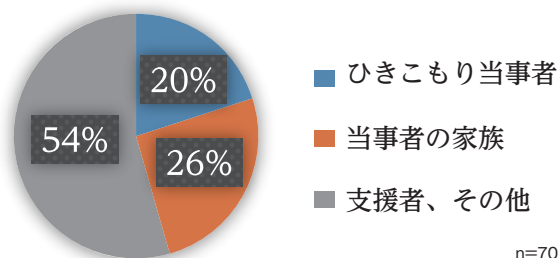
世田谷区内在住	13 名
世田谷区外在住	42 名
無回答	15 名

5. 今回の内容はいかがでしたか。(n=70)

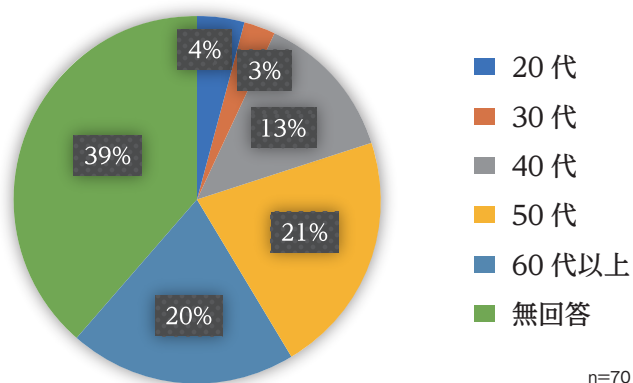
とても満足	満足	やや不満足	不満足	無回答
24	21	10	0	15

※参加者数はアンケート回収にて
確認をした総数

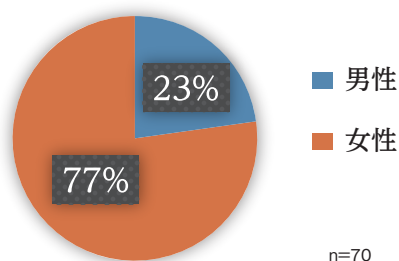
参加者内訳



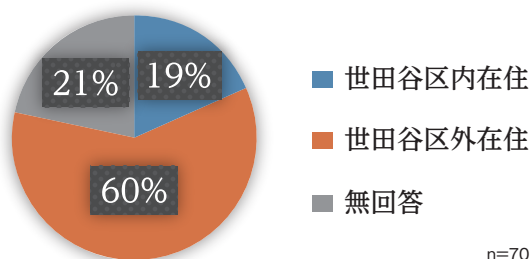
年代



性別



居住地域



今回参加しての所感やご意見

- もやもやしたものを抱えたまま、どうにかしようとしないうそのことの大切さを改めて体感しました。
- 対話を通して人と人が理解できるパワーのある人がコントロールしない聴くことの大切さを教えていただきました。ありがとうございます。
- 森川先生のお人柄にも触れることができてうれしかったです。先生の話し方・話の進め方そのものが対話の実践なのだと感じました。
- 人と会話（→対話）をする時の自分の姿勢とか、相手への尊重とかを無理せずに行えるようになったと感じます。
- 答えのない支援、都度考え工夫が大切と理解しました。5分トークは良い手法と思いました。他の参加者の方と話をした時にオープンダイアログまで行くのができない、部屋から出て来ないから会話がなかったから、まずそこを知れたらとの話がありました。どうしたらよいかということだと思いました。
- オープンダイアログ自体の体験は出来なくて残念だった。講演会の位置づけとして参考になった。無料のイベントの限界だと感じています。
- オープンダイアログを実際に体験したかった。完璧にこなすのは難しいとは思いますが、オープンダイアログの難しさを体感するだけでも良かったと思う。
- 体験型のイベントがあれば参加したいと思っています。

オープンダイアログ 体験会

参加無料 先着100名

10/9 (水)
13:00~16:00

オープンダイアログとは
「開かれた対話」という意味のオープンダイアログは精神的に困難を抱えた方と一対一ではなく、関係者を含めた3人以上で輪になって、お互い対等な立場で行う対話のことです。

対話を体験しませんか？

得意のことを話し ...言い争いになってしまう 心配な気持ち どう伝えたら... 当事者家族	ひきこもり当事者・ 元当事者 つらい気持ちを どうしてかかって もらえないだろう...	家族が落ち落いて 話ができるように どんなお手伝いができる のだろうか... 支援者
---	--	---

講師 森川すいめい氏
精神科医、鍼灸師、オープンダイアログ実践の専門家として、オープンダイアログ国際トレーナー資格を取得。

対象 ひきこもり問題に興味があり、対話を体験したい方
宮田谷区玉川区民会館「玉川せせらぎホール」
宮田谷区民会館4F4-1
大井町線宮田谷駅下車徒歩5分

お申し込みは 03-5431-5354 (ふらっとホーム宮田谷)
こちらのQRコードからも申し込みできます

主催 居場所カフェ コモリナ 共催 コムっとホーム宮田谷 協賛 宮田谷区民会館・宮田谷区民会館4F4-1
一般社団法人ライフプランニング・ソリューションズ



4. 「第4回かたら～な」(当事者会、家族会との連携)

当事者会の「居場所カフェ コモリナ」主催で家族会、「リンク」も協力をして開催。当事者、家族、支援者等たくさんの人が参加してゲストのテーマごとに対話を行った。

■ 開催概要

開催日時：2025年3月16日(日)

場所：らぷらす研修室1, 2, 3, 4

主催：居場所カフェ コモリナ

共催：ぷらっとホーム世田谷、世田谷はなみずきの会

後援：一般社団法人Vielfalt、COMOLY、一般社団法人
ライフプランニング・リレーションズ

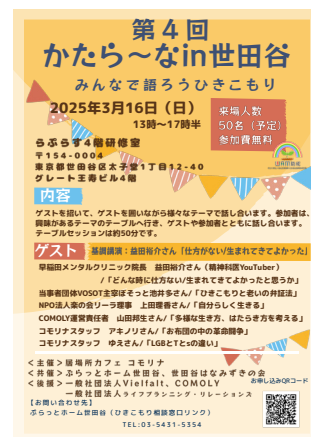


■ 当日の様子

テーマごとにゲストスピーカーがメインとなって、参加者とセッションをした。

◆ テーマ

1. どんな時に仕方がない／生まれてきてよかったと思うか／ゲスト：益田さん
2. ひきこもりと老いの弁証法／ゲスト：ぼそっと池井多さん
3. 自分らしく生きる／ゲスト：上田さん
4. 多様な生き方、はたらき方を考える／ゲスト：山田さん
5. お布団の中の革命闘争／ゲスト：アキノリさん
6. LGBとTとsの違い／ゲスト：ゆえさん



■ 参加者

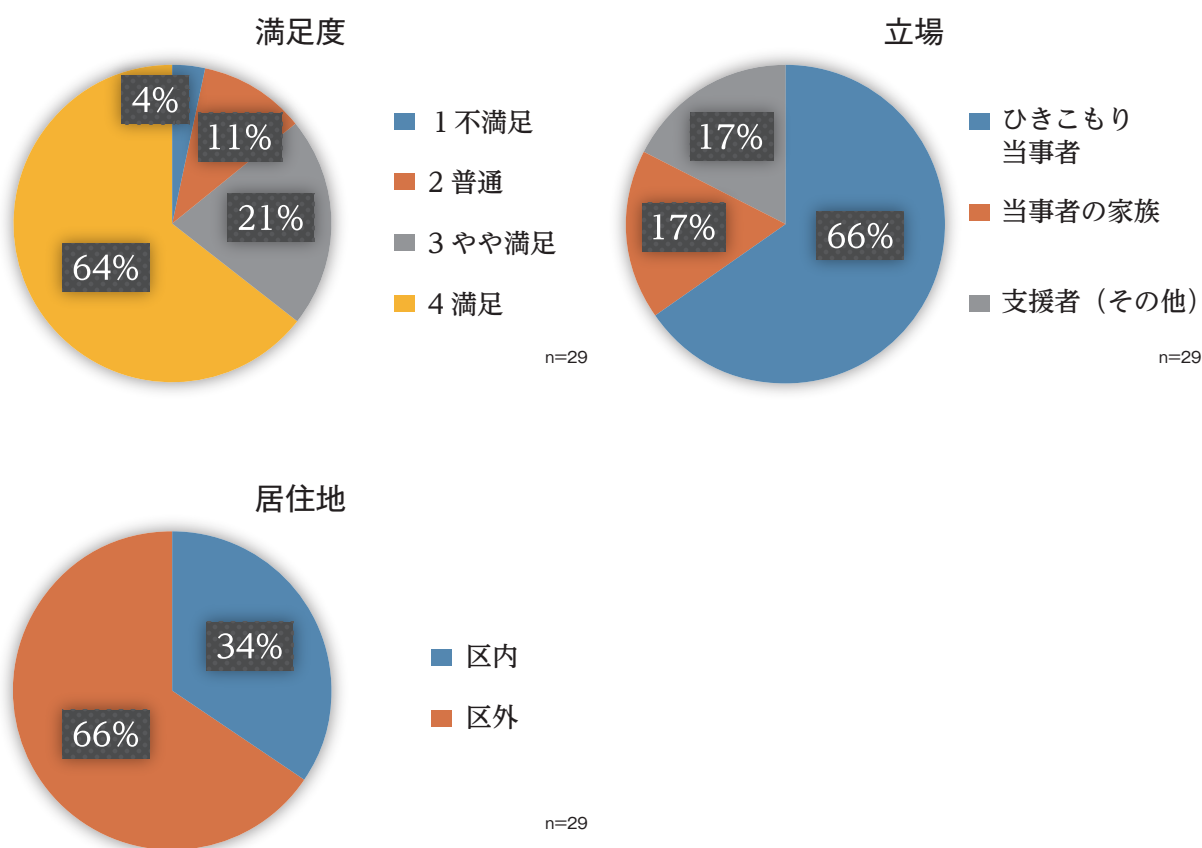
参加者：総数 72 名（一般参加 54 名、ゲスト 4 名、スタッフ 14 名）

■ 参加者のアンケート

【感想】

- 社会からの偏見や選択肢の不足で苦しんでいる話が出て、その話が深掘られて面白かった。
- ぼそっと池井多さんの孤独死は本当に悪いのか、という言葉が強く印象に残りました。
- 50～60代のひきこもりは「孤独死」について語り合うことが多い、というお話が印象に残った。
- 上田さんのお話を聞いて、今の大切さがわかりました。

- 「LGBとTとsの違い」はとてもわかりやすく良かったです。なかなか知る機会がないので。
- 自分のはたらき方を改めて考えるきっかけにもなった。
- 自分の今の具合での働き方がどうかな？と思って参考になった。
- 参加者のいろいろな声を聴くことができ、ゲストの真摯な応答をうかがうことができました。
- 参加者が多くなく、コミュニケーションをとりやすかったのが良かったです
- 自己寛容に関して興味があった。ジェンダー平等と保守主義の共存を考えているため。
- 生まれてきてよかったと考える思考は止めている自分に気が付いた
- バランスよく話すことができ、有益な情報も提供していただいた
- ひきこもり、仕事の有無に関わらず、環境にあわせらず、困ることがあるのですが、益田先生のアドバイスに助けられました。
- 参加者のいろいろな声を聴くことができ、ゲストの真摯な応答をうかがうことができました。
- 年に1回じゃなくて、もっと回数を増やしてほしいです。



第五章 総括

第1節 令和6年度の取り組み状況

1. 「リンク」内の協働
2. 多機関との協働

第2節 次年度に向けて

1. 「リンク」の相談・支援体制の維持・向上
2. より良い支援に向けて

第1節 令和6年度の取り組み状況

1. 「リンク」内の協働

「リンク」に来所される方は、「世田谷区ひきこもり支援に関わる基本方針」で示されているような、ひきこもり状態を含む社会との接点が希薄な方や社会との接点が持ちづらい状況にある方であり、ひきこもりと言っても一人ひとりの生活環境や世帯状況、心身の状態、抱える課題は様々です。そのため、相談・支援には個別性が必要とされており、「リンク」の相談を開始してから丸3年が経過していますが、いまだに手探りの状態が続いています。毎週のケース検討会で、メルクマールせたがやの専門職によるアセスメントに基づくアプローチとぶらっとホーム世田谷の生活全般へのアプローチ、さらに関係機関の支援や地域資源の活用なども視野にいれながら、当事者やそのご家族の思いや課題に寄り添い、臨機応変に必要な支援を協働して行ってきました。また、支援体制の強化を図るために、メルクマールせたがやとぶらっとホーム世田谷、行政の担当課が共通で利用できるシステムを導入し、リアルタイムで情報を共有、対応をできるようにしました。

2. 多機関との協働

「リンク」の当事者からの相談の中で、「就労」を希望する声が多いと感じています。一方でひきこもり状態にあったことで、自身の心身の状況もさることながら、OA化による仕事の内容や設備等が大きく変化し、就労を取り巻く環境が大きく変わっていることから、新たに就労を実現し継続していくことは心身ともに負担が大きく、体調や生活リズムを崩すことにもなりかねません。そのため、リンク相談員と生活困窮者自立支援事業の就労担当とで月1回、定例打合せを行いながら、心身の体調に配慮しながら慎重に支援を行いました。

また、「リンク」の相談の6割が親やきょうだい等の家族からであることから、ひきこもり支援は、家族の問題とも言えます。家族内では解決できない課題を抱え、日常生活に支障を来している場合には、重層的支援体制整備事業の多機関協働事業者として、社会福祉法第106条に基づく支援会議を開催し、家族各々に関わる機関や今後関わりが必要と思われる機関が集まり、情報を共有・検討し、各々の機関が取り組めることを出し合いながら、支援を進めました。



第2節 次年度に向けて

1. 「リンク」の相談・支援体制の維持・向上

「リンク」の終結は、令和6年度対応件数426件に対し、64件と多くありません。相談者として最も多い家族等が相談に来た場合は、ひきこもり当事者につながるまでに時間がかかることや相談支援が始まっても、当事者や家族の不安が減り、生活が落ち着くまでに相当な時間が必要なことを示していると言えます。このように支援が長期化する中で、当事者と一緒に起こりうる心身の状態や生活環境の変化を捉え、状況に合わせた支援を多機関との連携・協働により、柔軟な対応が必要とされています。また、利用者の多くが精神的な不調を抱えているため、引き続き、メルクマールセタがやとぶらっとホーム世田谷の専門性を有効に活用しながら、より効果的な支援を行ってまいります。

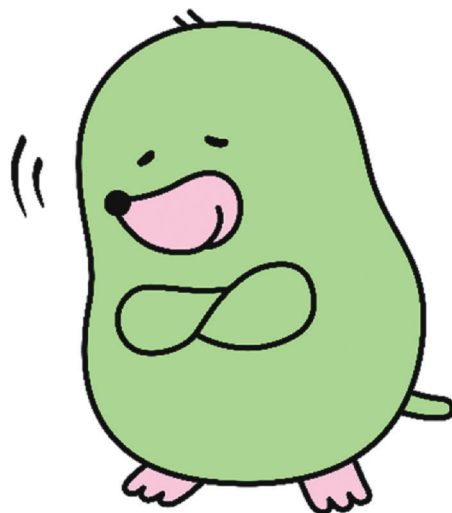
2. より良い支援に向けて

世田谷区のひきこもり支援に係る基本方針（令和3年3月策定）に基づき開始してから、リンクにつながったひきこもり当事者は3年間で185人となりました。当事者からの相談も増えていますが、まだまだ相談が必要な方とつながっていないと感じています。

一方、相談につながった方に聞いてみると、相談に来所されるまでに、相当の時間を要していることがわかります。実際にひきこもり状態になってからも、相談や支援介入に適した機会があっても、なかなかつながることができず、長期化している状況があります。また、養育期、学齢期と相談・支援機関が関わっていたケースが、成長とともに制度の年齢対象から外れることで支援が途切れてしまったケースも散見されています。

さらに、ひきこもりの当事者の相談内容が、ひきこもり期間やその状態にかかわらず多岐にわたっていることもわかってきました。

こうしたことから、リンクでは、生きづらさを抱え、社会から孤立して日常生活に支障をきたすような困りごとを抱えている方が、相談の機会を逃さないように、まずは話を伺い、一緒にできることを探していくことで、区民の方々が、思い立った時に、相談ができ、話せてよかった、また話してみたいと思える窓口となるよう、引き続き努めてまいります。

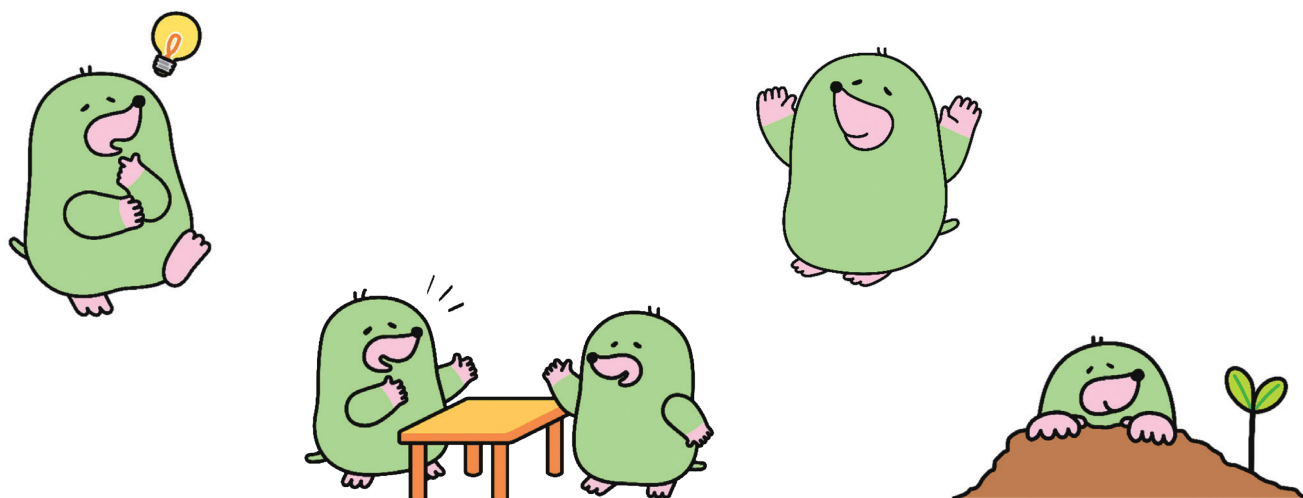
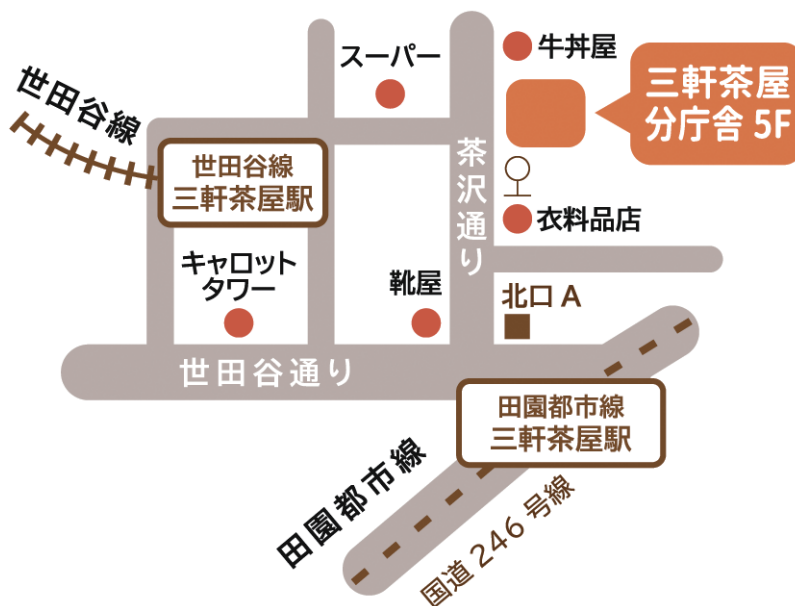


世田谷 ひきこもり相談窓口 「リンク」

 電車 東急田園都市線
「三軒茶屋」駅徒歩 3 分
東急世田谷線
「三軒茶屋」駅徒歩 2 分

 バス 世田谷通りから
渋谷方面行「三軒茶屋」
徒歩 1 分

※駐輪場・駐車場はありません。



世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」 令和6年度 事業報告書

令和7年9月発行

編集・発行

世田谷区生活困窮者自立相談支援センター
(ぶらっとホーム世田谷)

事業運営

社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
公益社団法人 青少年健康センター【茗荷谷クラブ】

所在地

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 2-16-7
世田谷区役所三軒茶屋分庁舎5階

Tel 03-5431-5354

Fax 03-5431-5357

「リンク」HP

https://platsetagaya.jp/hikikomori_soudan





世田谷
ひきこもり相談窓口「リンク」